

水シンポジウム 2025 in やまなし

山梨・暴れ川富士川の治水・利水・環境
古の知恵と現代の技術の融合
～過去は未来のみちしるべ～

富士川流域における治水・利水の歴史と環境との調和に注目しながら、
気候変動や防災意識の低下といった課題に向き合う持続可能な水との付き合い方を考えます。

実施報告書

- シンポジウム：令和7年10月24日（金）
- 現地見学会：令和7年10月25日（土）

「第29回水シンポジウム2025 in やまなし」実行委員会

「第29回水シンポジウム2025 in やまなし」開催運営支援業務 受託者

目次

開催概要	p.1
開催趣旨	p.2
タイムスケジュール（詳細）	p.3
現地見学会	p.4
シンポジウム：開会	p.5～11
シンポジウム：講演1	p.12～15
シンポジウム：講演2	p.16～19
シンポジウム：講演3	p.20～23
シンポジウム：質疑応答（前半）	p.24～25
シンポジウム：話題提供1	p.26～29
シンポジウム：話題提供2	p.30～33
シンポジウム：話題提供3	p.34～35
シンポジウム：質疑応答（後半）	p.36～37
パネルディスカッション	p.38～41
総括	p.42～43
次回開催県挨拶	p.44～45
シンポジウム同録動画youtube	p.46
会場全体レイアウト	p.47～48
ブース展示レイアウト	p.49～50
ポスター展示レイアウト	p.51～54
会場風景（シンポジウム）	p.55
懇親会	p.56
見学風景（現地見学会10/25）	p.57～60
広報宣伝	p.61～65
広報宣伝（当日配布物）	p.66
広報宣伝（新聞広告）	p.67
報道実績	p.68
広報宣伝（WEB広告）	p.69
ホームページ	p.70～71
看板関係	p.72～73
駐車場	p.74
バス関係	p.75～77
来賓・登壇者控室	p.78
来場者アンケート	p.79～89
参考資料（実行委員会規約・名簿、活動状況、現地見学会の抜粋資料）	p.90～99

開催概要

- 名称： 第29回 水シンポジウム2025 in やまなし
- メインテーマ： 山梨・暴れ川富士川の治水・利水・環境 古の知恵と現代の技術の融合
～過去は未来のみちしるべ～
富士川流域における治水・利水の歴史と環境との調和に注目しながら、気候変動や防災意識の低下といった課題に向き合う持続可能な水との付き合い方を考えます。
- 会期： 2025年10月24日(金) 12:30～17:30 (開場 11:30)
2025年10月25日(土) 9:00～ 17: 00 (集合 8:50)
- 会場： 10/24【シンポジウム】リッチダイヤモンド総合市民会館 (甲府市総合市民会館)
【懇親会】オープンカフェまるごとやまなし館 (県庁防災新館1F)
10/25【現地見学会】南アルプス市／甲州市ほか
- 参加方法： ホームページ (<https://amsys.jp/mizusympo2025/>) 上の申込フォームまたはFAXか郵送での申込
- 参加料・締切： 10/24【シンポジウム】無料、10/22(水)締切
10/24【懇親会】5,000円(税込)、9/19(金)締切 ←申込状況により8/19受付終了
10/25【現地見学会】昼食・保険料として2,000円(税込)、9/19(金)締切
- 主催： 「第29回水シンポジウム2025 in やまなし」実行委員会
構成団体： (公社) 土木学会水工学委員会、国土交通省関東地方整備局、山梨県、甲府市
- 支援： 土木学会関東支部山梨会、山梨大学地域防災・マネジメント研究センター、山梨大学国際流域環境研究センター、(公社) 山梨県建設技術センター、(一社) 山梨県建設業協会、(一社) 山梨県建設コンサルタンツ協会、山梨県地質調査事業協同組合
- 助成： (公財) 河川財団、(一財) 防災研究協会、(一社) 関東地域づくり協会
- 後援： (一社) 山梨県測量設計業協会
- 来賓： 山梨県副知事、甲府市市長、国土交通省 関東地方整備局長
- 講演内容： 該当ページ参照
- その他： CPD認証 (シンポジウム 3.2単位、現地見学会 2.9単位)
- シンポジウム
来場者： 約300名
- 展示： ポスター展示 (ホワイエ、イベントモール) 14団体
ブース展示 (多目的室) 8ブース、屋外展示 1社
- 配信： オンデマンド配信 (後日)
- 懇親会参加者： 39名
- 現地見学会
参加者： 39名
- 広報： チラシ、ポスター、ホームページ、Googleディスプレイ広告、山梨日日新聞広告

開催趣旨

山梨・暴れ川富士川の治水・利水・環境 古の知恵と現代の技術の融合 ～過去は未来のみちしるべ～

水シンポジウム2025 in やまなしは、わが国の代表的な扇状地河川であり「暴れ川」として知られる富士川を舞台に、「治水・利水・環境:古の知恵と現代技術の融合～過去は未来のみちしるべ～」をテーマに開催します。

武田信玄から始まり今も受け継がれる伝統的治水や、限られた水資源を共有して果樹栽培を発展させてきた利水の知恵を振り返りつつ、気候変動時代における豪雨や渇水の激甚化にどう向き合うか、また富士川の美しい景観・環境を後世に引き継ぐためには何が必要かを議論します。

講演・話題提供やパネルディスカッションでは、学識者・行政・市民・企業が一堂に会し、流域治水や水資源管理の新しい展開を共有し、環境保全と地域社会の持続的発展の両立を模索します。

さらに、全国でも珍しい文化財指定を受けた御勅使川の治水システムや世界農業遺産に指定された峡東地域の果樹園や砂防施設などを訪れる現地見学会を通じ、歴史に根差した水との関わりを体感し、現代の防災・減災や環境施策に生かす視点を養います。

本シンポジウムは、山梨の知恵を全国へ発信するとともに、次世代への継承や地域連携を通じて未来の流域治水を主体的に担う人材育成の契機となることを目指します。



南アルプス市 穂島郷における河形見訪

実行委員長 田中规夫

(土木学会水工学委員会委員長/

埼玉大学 大学院理工学研究科 環境科学・社会基盤部門 教授)

土木学会水工学委員会は1996年より全国で水シンポジウムを開催しており、第29回となる今回は山梨県甲府市で開催いたします。暴れ川として知られる富士川は、我が国でも長い治水の歴史を持ち、扇状地で限られた水を活かす利水の知恵を育んできました。また地下水や清流は地域の生活や文化、自然環境を支える大きな恵みでもあります。近年、気候変動により豪雨や渇水が心配される中、本シンポジウムでは「治水・利水・環境:古の知恵と現代技術の融合」をテーマに、水の恵みとリスクの双方を踏まえ、未来に生かす水との関わりについて理解を一層深めて頂けると幸いです。



タイムスケジュール (詳細)

■シンポジウム当日進行表

time	lap	
11:30		開場
12:30		開会
12:31	5	主催者挨拶 (実行委員長)
12:36	5	実行委員紹介
12:41	5	来賓挨拶 (山梨県 副知事 井上弘之 様)
12:46	5	来賓挨拶 (甲府市 市長 樋口雄一 様)
12:51	5	来賓挨拶 (国土交通省 関東地方整備局長 橋本雅道 様)
12:56		登壇者降壇・ステージ転換
13:00	30	【講演1】 「御勅使川における治水・利水の歩み ～過去は未来のみちしるべ～」 南アルプス市教育委員会文化財課 斎藤秀樹 様
13:30	30	【講演2】 「営みがつくった世界農業遺産 ～堰と果物と峡東の風景～」 峡東地域世界農業遺産推進協議会 アドバイザー 中村正樹 様
14:00	30	【講演3】 「できることからはじめよう 小さな流域治水のススメ」 滋賀県立大学 環境科学部 教授 瀧 健太郎 様
14:30	10	質疑
14:40	30	休憩・展示見学
15:10	20	【話題提供1】 「『サントリー天然水の森』を通じた水源涵養活動」 サントリーホールディングス株式会社 サステナビリティ経営推進本部 (地域共創) 天然水の森グループ スペシャリスト 市田智之 様
15:30	20	【話題提供2】 「コーセーグループサステナビリティ戦略と水の取り組み」 & 「豊かな水を求めて探し当てた山梨への想い」 株式会社コーセー 経営企画部サステナビリティ戦略室 田口陽子 様 執行役員 生産部 部長 黛博道 様
15:50	20	【話題提供3】 「寄せ水・寄せエネ、普段にも災害にも」 山梨大学国際流域環境研究センター・(一社) 小さな水 西田継 様
16:10	10	質疑
16:20	10	休憩・展示見学・ステージ転換
16:30	40	【パネルディスカッション】
17:10	10	総括 (田中委員長)
17:20	10	次回開催県挨拶 (徳島県)
17:30		閉会
18:00		展示終了
18:30		懇親会

現地見学会

■現地見学会工程表

time	lap	
8:40		山梨県庁西側正門（議事堂前）
9:00	40	出発
9:40	20	①信玄堤公園 着
10:00	15	移動
10:15	20	②南アルプス市ふるさと伝承館 着
10:35	15	移動
10:50	20	③柘形堤防／徳島堰 着
11:10	10	移動
11:20	20	④石積出三番堤 着
説明①～④：斎藤秀樹氏（南アルプス市教育委員会）ほか		
11:40	40	移動
12:20	60	⑤昼食「里の駅いちのみや」 着
13:20	10	移動
13:30	50	⑥勝沼ぶどうの丘 着
14:20	10	移動
14:30	20	⑦日川水制群（シャトーメルシャン勝沼ワイナリー） 着
14:50	10	移動（徒歩）
15:00	20	⑧シャトー・メルシャンワイン資料館（宮光園） 着
説明⑥～⑧：室伏 徹氏（山梨県考古学協会） 中村正樹氏（峡東地域世界農業遺産推進協議会）		
15:20	30	移動（徒歩）10分+バス20分
15:50	20	⑨笛吹川・万力公園（万力林） 着
説明⑨：瀬尾敬介氏（国土交通省甲府河川国道事務所）		
16:10	40	移動
16:50		山梨県庁西側正門（議事堂前）

シンポジウム：開会

■ 来場者数：約300人



■ 主催者挨拶

実行委員長 田中 規夫（たなか のりお）

土木学会水工学委員会を代表し、本シンポジウムの実行委員長として一言ご挨拶申し上げます。水工学委員会では、1996年より全国各地で「水シンポジウム」を開催しており、今回で第29回を迎えます。今年は関係各位のご協力を賜り、ここ山梨で開催の運びとなりました。

この「水シンポジウム」は、市民、学会、行政、民間企業などが一堂に会し、水に関するさまざまな課題について議論し、相互理解と情報共有を図る場として毎年、各都道府県で開催されています。山梨県での開催は今回が初めてです。

ご承知のように、富士川は「暴れ川」として知られますが、その一方で長い治水・利水の歴史を有しています。扇状地という限られた水資源を生かすための知恵が古くから生まれ、地下水や清流は地域の生活、文化、そして自然環境を支える大きな恵みとなってきました。

近年、気候変動の影響により豪雨や渇水のリスクが高まる中、本シンポジウムでは「気候変動下における治水・利水の知恵と現代技術の融合」をテーマに掲げています。とりわけこの地域には、歴史的に培われた治水・利水の経験が蓄積されており、それらを学び直すことで、過去から未来への水との付き合い方を再考する機会としたいと考えています。また、気候変動の影響や防災意識の低下といった現代的課題にも目を向けながら、持続可能な水との共生のあり方について理解を深めていきたいと思っております。

今回のシンポジウムは、「第29回水シンポジウム2025 in やまなし 大会実行委員会」により、土木学会水工学委員会、国土交通省関東地方整備局、山梨県、甲府市が主催しております。さらに、土木学会関東支部山梨会、山梨大学地域防災・マネジメント研究センター、同国際流域環境研究センター、山梨県建設技術センター、山梨県建設業協会、山梨県建設コンサルタンツ協会、山梨県地質調査事業協同組合などの皆様よりご支援をいただいております。また、河川財団、防災研究協会、関東地域づくり協会から助成を受け、山梨県測量設計業協会からご後援を賜りました。

本シンポジウムの開催にあたり、ご準備・ご協力をいただいた関係各位、ならびにご講演・話題提供をくださる皆様に厚く御礼申し上げます。本日の議論が実り多いものとなり、地域の未来に新たな展望をもたらすことを心より祈念いたしまして、私の挨拶といたします。

シンポジウム：開会



■ 実行委員紹介

- ① 実行委員長 埼玉大学 教授 **田中規夫**
- ② 名古屋大学 教授 **戸田祐嗣**
- ③ 京都大学 教授 **市川 温**
- ④ 山梨大学 准教授 **大槻順朗**
- ⑤ 国交省関東地方整備局河川部長 **室永武司**
- ⑥ 国交省関東地方整備局
甲府河川国道事務所長 **草野真史**
- ⑦ 山梨県県土整備部部长 **寺沢直樹**
- ⑧ 甲府市まちづくり部部长 **大森重竹**



シンポジウム：開会

■ 来賓挨拶

山梨県 副知事 井上弘之（いのうえ ひろゆき）様

皆様、こんにちは。山梨県副知事の井上弘之と申します。

本日から2日間、「第29回水シンポジウム2025 in やまなし」が盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。また、全国各地から山梨県にお越しいただきましたことを、心より歓迎いたします。

山梨県は、富士山をはじめ南アルプスや八ヶ岳など、日本有数の標高を誇る山々に囲まれた、自然豊かな地域です。これらの急峻な山々から流れ出る河川は、非常に強い勢いで流れ、特に富士川は日本三大急流の一つとして知られています。

今回のシンポジウムでは、この富士川における治水・利水の歴史と環境との調和が、テーマとして取り上げられると伺っています。県民の一人としても、たいへん興味深く、関心を寄せているところです。

また、本イベントでは、400年以上前に築造され、武田信玄公が治水のために力を注いだとされる信玄堤の現地見学会も予定されています。甲州流川除法（こうしゅうりゅうかわよけほう）として長い歴史をもつ治水技術を振り返っていただき、いにしへの知恵を現代に活かす一助としていただければと存じます。

さて、近年、気候変動の影響により、世界各地で水害が頻発しています。日本でも、毎年のように大きな水害が発生しており、昨年の石川県・奥能登豪雨や本年の熊本県をはじめとする豪雨災害など、深刻な被害が続いています。

こうした状況の中、山梨県では、激甚化する水害への備えとして、本年9月に県西部の南アルプス市を流れる横川を含む5河川を「特定都市河川及び流域」に指定いたしました。これを契機に、流域治水の対策を強化し、地域の安全と持続可能な発展を目指して参ります。

また、山梨県は豊富で良質な水に恵まれており、全国シェアの4割を占める全国トップのミネラルウォーターの生産をはじめ、ぶどうや桃などの果樹、ワインや日本酒、さらには和紙や織物といった、水の恩恵を受けた多くの産業が育まれています。これらはまさに「山梨県の宝」であり、今後も大切に守り続けていきたいと思っています。

本日のシンポジウムでは、水に関する多様な知見に基づく議論が交わされることと思います。それらが、地域の枠を越えた連携と、未来に向けた希望の光となることを、心より期待しております。

結びに、シンポジウムの成功と、本日ご参加の皆様のご健勝、ご活躍を心より祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



シンポジウム：開会

■来賓挨拶

甲府市 市長 樋口 雄一（ひぐち ゆういち）様

皆さま、こんにちは。

ただいまご紹介をいただきました、甲府市長の樋口と申します。

本日は、「第29回水シンポジウム2025 in やまなし」が全国から大勢の皆さまにご参加を賜りまして、盛大に開催されますことを、まずもって、心からお喜び申し上げます。ようこそ山梨県、そして甲府市へお越しくださいました。甲府市民を代表いたしまして、心より歓迎を申し上げます。

ここ甲府市は、1519年の開府から500年以上の歴史を持ち、緑豊かな自然に囲まれ、山梨県の政治・経済・文化の中心地として発展し、本年10月17日に市政施行136周年を迎えた中核市でございます。

現在、中部横断自動車道の静岡・山梨区間が全線開通したことに加えまして、リニア中央新幹線の開通に向けた整備事業の進展など、地域発展につながります。高速交通インフラ網が着々と築かれる中、新たな人や物の往来がますます活発になるものと期待されるところでございます。また、県都の玄関口であります甲府駅周辺では、甲府城の南側エリアに歴史・文化・交流施設「甲府 亀屋座」、そして、江戸情緒あふれる街並みを再現いたしました「小江戸甲府 花小路」が本年4月にオープンし、市内はもとより、県内外から大勢の方々を訪れていただいております。

このように本市では、古の歴史と文化を引き継ぐ「甲府駅周辺」と、新たな価値を生み出す「リニア駅周辺」の二つの拠点を核とした、未来へつなげる持続可能なまちづくりを進めているところであります。

一方、本市が中央に位置いたします「甲府盆地」は、古くは河川の氾濫原や水害の影響を受けやすい低湿地が諸所に広がっており、急峻な南アルプスや奥秩父山系を源流とする、西は釜無川、東の笛吹川といった富士川水系の急流河川による水害に悩まされておりました。

こうした中、甲斐の名将・武田信玄公が約20年もの歳月をかけ、1560年に完成されたとされております釜無川の「信玄堤」は、先ほど副知事からのお話もございましたけれども、まさに当時といたしましては画期的なものであり、今もなお治水対策の象徴として現存しているところでございます。

一般的に「信玄堤」といえば、お隣の甲斐市に築かれたものが広く知られているところでございますが、実は甲府市内にも存在しているところでございます。

かつては、高品質な水晶の産地として栄え、「宝石のまち甲府」の始まりとなりました、本市と長野県川上村との境にございます、標高2599メートルの金峰山を源流といたしまして、日本遺産の御嶽昇仙峠を経て「甲府盆地」へと流れる「荒川」におきまして、霞堤という信玄堤特有の遺構を確認することができます。

この「信玄堤」の建設により洪水被害が減少し、新たな水田が開拓されたことで農業生産力が一気に向上し、中世末期以降の「甲府盆地」の発展につながってきました。私たちは、こうした先人の治水・利水に対する知恵と工夫をしっかりと受け継ぎながら、現代の技術と融合させ、世代に引き継がなければならないというふうに考えております。

近年、全国各地で毎年のように浸水被害や土砂災害が発生する中で、今回、日本三大急流でございます、富士川水系をテーマに、このようなシンポジウムが開催されることは、とても意義深いものと感じており、本日交わされます、活発な議論や提言が全国へと発信されることで、「水」と人々の生活がさらに豊かなものになりますことを心より期待をするところでございます。

結びに、シンポジウム実行委員会の皆様方をはじめ、開催に大きなご支援をいただきました多くの関係者の皆様方に、心から感謝申し上げますとともに、お集りの皆様方のますますのご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げまして、挨拶とさせていただきますと存じます。

本日は誠にありがとうございます。

シンポジウム：開会



シンポジウム：開会

■ 来賓挨拶

国土交通省 関東地方整備局長 橋本 雅道（はしもと まさみち）様

ご紹介いただきました、国土交通省関東地方整備局長の橋本でございます。本日は、第29回水シンポジウム2025 in 山梨の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

ここ山梨県を流れる富士川は、日本三大急流の一つに数えられ、「暴れ川」として古くから知られてまいりました。戦国時代には、武田信玄公が甲府盆地を水害から守るため、信玄堤や万力林など独自の水防策を施し、治水の礎を築きました。また、扇状地という地形を生かし、水の確保が難しい環境の中で多くの工夫が重ねられ、甲府盆地では長年にわたり水利用の知恵が培われてきました。釜無川などを中心に多くの用水路が整備され、約3万1200ヘクタールの土地で農業が営まれるようになったと伺っております。これらの取り組みが地域の生活や発展に大きく寄与してきたことは言うまでもありません。

国では、明治以降の度重なる洪水を契機として、河川改修や築堤、護岸整備などの事業を進めてきました。特に昭和34年や昭和57年の洪水を教訓に、現在進めている治水整備は、それらの洪水規模に耐え得るレベルを目指したものです。近年は気候変動の影響により、災害の激甚化・頻発化が懸念されており、本年3月には「富士川水系河川整備基本方針」を変更しました。従前の降雨量の1.1倍にも耐え得る方針を定め、これに基づいた河川整備計画の変更手続きを進めております。

また、国土交通省では、流域全体のあらゆる関係者が連携して治水に取り組む「流域治水」をさらに進化させるため、「流域治水プロジェクト2.0」として新たな取り組みを加速しています。日本全体を見ましても、今年も多くの水害が発生しました。8月には北日本から西日本にかけて線状降水帯による記録的な大雨が降り、静岡県では台風15号に伴う国内最大級の竜巻が発生しました。さらに今月は台風22号・23号が連続して八丈島を襲い、道路の通行止めや断水、停電など甚大な被害が出ています。今後も気候変動に伴う災害の激甚化が懸念されており、国としても外力の増大を見据えた多様な手法による対策を重視しております。この流域治水の推進には、河川管理者だけでなく、地域の皆さまをはじめとする幅広い関係者のご協力が不可欠です。

一方で、洪水だけでなく、近年は渇水の問題も深刻化しています。今年は過去最も早い梅雨明けとなり、東北日本海側や北陸地方では、7月の降水量が統計開始以来最少を記録しました。全国では27水系・35河川で取水制限等の渇水対策が実施され、国土交通省としても平成29年以来8年ぶりに「渇水対策本部」を設置しました。この一年は、「水をいかに扱うか」という課題を改めて突きつけられた年だったと感じております。

今後の気候変動を考えますと、豪雨と渇水という相反する事象の振れ幅がさらに大きくなると予想されます。治水対策のみならず、渇水リスクへの備え、そして水道・下水道など水関連インフラの老朽化対策も、同時に進めなければなりません。こうした状況の中で、「水との付き合い方」を改めて問い直すことが重要です。災害、渇水、人口変動による水需要の変化など、あらゆる視点から今後の対応を深めていく必要があります。

そのような時期に、本日このように多くの皆さまが集い、水をテーマに意見交換を行うシンポジウムが開催されますことは、誠に意義深いことです。

専門家や地域企業の皆さまからの貴重なお話を通じて、参加される一人ひとりが治水・利水を含めた「水に対する意識」をさらに高め、未来の世代に持続可能な水のあり方を引き継ぐ契機となることを願っております。

シンポジウム：開会

結びに、本シンポジウムの開催にあたりご尽力いただいた関係者の皆さまに深く敬意を表し、参加者の皆さまにとって有意義な時間となることを祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



シンポジウム：講演1

南アルプス市教育委員会文化財課

齋藤 秀樹氏

「御勅使川における治水・利水の歩み

～過去は未来のみちしるべ～」



暴れ川として知られた御勅使川は、「水絶え川」と言われるほど地表での水量が少ない川でもありました。そのため、御勅使川扇状地では治水と利水の知恵と技術が積み重ねられ、現代の安全で水の豊かな地域が作り出されました。今後世界規模で進むと予想されている洪水と早ばつに向き合うためのみちしるべとしてその歴史をひもときます。

◆講演内容

南アルプス市教育委員会文化財課に勤めております齋藤と申します。よろしくお願いたします。私の話は、なぜ教育委員会文化財課の者がこの場でお話しするのか、という点から始めます。

これは南アルプス市の遺跡地図で、オレンジ色が通常の遺跡です。北側に御勅使川が流れ、東側に釜無川があり、有名な信玄堤はこちらにあります。山梨県は信玄堤の研究を契機に、さまざまな治水・利水の調査研究が進められてきました。市内では過去の堤防が遺跡となっています。御勅使川沿いには赤い線が多数見えますが、これが堤防遺跡で、多くの堤防が遺跡になっています。これは文化財行政にとって非常に特殊なことなんです。日本全国で堤防が遺跡（文化財）として扱われる例は、10年前までは非常に少ない状況でした。今でも日本全国を見渡しても堤防が遺跡となっている例は多くありません。

山梨県と言えば「水」であり、水との暮らしに関わる堤防は文化財として大変重要であると、先輩方が認識し、県内全域、各町村を歩いて遺跡にしていきました。埋蔵文化財に関して、私の担当する中心のエリアは御勅使川流域です。堤防が遺跡になっていますので、文化財保護法に基づき開発があれば状況によって発掘調査を行うこととなっています。私の仕事というのは一つは御勅使川沿い、あるいは前御勅使川という古い流路沿いに開発があった場合、調査をし、遺構はどういったものなのか判断することです。その中で蛇籠や根固めが出てくることもあり、河川の知識も必要となってきます。さらに、いつの洪水か、その後どう修復されたのかを地域史に落とし込むことが我々の仕事であるため、文献史学の先生方とも連携し、水との関わりを検討してきました。

また南アルプス市には、石積出・榎形堤防・六科将棋頭の三カ所と、韮崎市の下條南割将棋頭と合わせて、国の史跡（動かない重要文化財）に指定されています。これはとても重要なことで、全国に約1900件の史跡がありますが、その中で人の命を守ってきた河川堤防という土木遺産が史跡指定されているのは、たった3件しかありません。これは山梨県の人々が治水・利水に尽力した象徴であり、日本の治水・利水を代表するものだと思っています。私はその発掘調査・研究・保存に携わってきました。

南アルプス市では「教育普及事業」として、市の文化財全体を通じてその魅力を発信しています。年間の出前授業は文化財課全体でおおよそ230～240件、そのうち約130件が小中学校です。治水・利水の歴史や最新研究を、子どもたちや地域にいち早く届けています。来週も小学校に出向き、事前学習と将棋頭や榎形堤防の現地見学を実施します。

シンポジウム：講演 1

私がお伝えしたい点の一つは、まず信玄堤の存在が山梨の研究を推進してきたことです。土木工学・文献史学・考古学の連携により、全国的にも調査研究が進み、その成果は膨大です。現在は信玄堤研究を超えて、戦国・江戸・明治・大正と、さまざまな技術者や地域の人々が堤防を設計・施工し、流失を経て新技術を取り入れるという試行錯誤の知恵が蓄積されてきました。山梨県はこのような水との付き合い方を全国に発信できる地域だと考えています。

第1章では、地形を概観します。釜無川、巨摩山地からは御勅使川が流れ、これが本日の中心地域です。「甲府盆地は湖だった」という言説がありますが、地質学的にその事実はありません。ただし水にまつわる湖水伝説は南アルプス市三輪明神（神部神社）の曳舟神事など県内各地にあり、水とのかかわりのスタート地点となっています。本市の市名となっている3000メートル級の山々が連なる南アルプスには豊かな万年雪がありますが、この雪解け水は早川に落ちてしまいます。御勅使川はその前衛の巨摩山地が源流で、流量は相対的に少ないことが大きな特徴の一つです。御勅使川は巨摩山地の急峻な山を刻み、下流に扇状地（御勅使川扇状地）が形成されました。

富士山側から南アルプス市をみると、御勅使川・釜無川に囲まれた地域は、その地形特性に合わせて、地元の言葉で山方・根方・原方・田方と呼ばれてきました。特に原方と田方の性質は対照的です。御勅使川は砂礫を運ぶため畑は砂利質で、水は浸透しやすく、扇状地中央部の原方は「原方にある七つの村は月夜の光でも焼ける」と言われるほどの常習干ばつ地帯でした。一方で水は地下深くで豊かな地下水となり、扇状地扇端部で湧出します。その南側に広がるのが田方で、南側の田方を遺跡調査で40cmも掘れば水が湧き出てきます。一方原方では5m掘っても水が出ないなど、水環境では対照的な地域でした。地域の人々はこれらの土地に合わせて、うまくつきあってきたのです。

第二章として御勅使川の特性を挙げれば、みなさんご存知のとおり暴れ川です。明治29年石積出が壊された大洪水が起こり、その後砂防技術の進展にもかかわらず、上流の芦安地域では昭和34年の伊勢湾台風時集落の一部が流され、昭和57年の水害では、コンクリート製の堤防や護岸が破壊されました。現在山梨県は水害がない地域と地元で言われていますが、歴史からみるといくつもの災害があったからこそさまざまな技術によって御勅使川の洪水を治めている状態だと伝えていきます。2019年にも台風19号によって関東で大きな被害がありましたが、いくつもの仕組みで御勅使川の洪水を抑え込む努力が続いています。一方、無降雨期には川が涸れ、御勅使南公園前でも流水が見られないことがあります。地名の語源には「水が絶える川」という説もあります。水は地下に浸透し、扇状地扇端部で大量に湧出します。

第三章、武田信玄の治水事業について、多くの概説は信玄が亡くなって数百年後に記された『甲斐国志』（1814年）の記述に依拠しています。これをまとめると、戦国時代に本流だったと言われる前御勅使川を北側の高岩で釜無川と合流させるため、石積出（堤防）を築いて流れを北に向け、将棋頭で分流し、新しいルート上にある龍岡大地を開削して（堀切）、十六石という巨石を置いてその流れを弱め、高岩の西側で釜無川に合流させ、さらに信玄堤を築いて釜無川の流路を南側に向けて、甲府盆地中央部を守ったというものです。ただ、石積出や将棋頭は考古学的にも文献上でも信玄築堤を示す証拠が見つかりません。まだ言い伝えの段階です。さらに新しく開削された御勅使川のルートは、韮崎市の発掘調査によって、信玄の時代より古い時代に存在していたことが明らかとなっています。伝承は見直しながら、新たな調査を進めています。ただし、信玄堤の築堤については、信玄の事業として明確な資料が存在しています。

戦国時代、釜無川は甲府盆地中央部を自由に流れていました。信玄の時代、信玄堤が造られ釜無川の流路が南へ変えられて以後、信玄堤は南へ伸ばされ、さらに（現在の昭和町付近に）かすみ堤が築かれました。これによって左岸側（甲府盆地中央部）は安定する一方、右岸側（現在の南アルプス市側）は洪水が多発することとなり、多くの村が集落移転を余儀なくされました。江戸時代右岸側でも堤防整備が進み、その結果明治時代に現在の釜無川が形づくられました。水のコントロールには成功と失敗の両面があり、技術者と地域人々の試行錯誤の積み重ねが現在に続いています。この積み重ねられた歴史がこれからの時代にとっても役立つ文化遺産だと考えています。皆さんの今日の仕事も、いずれ歴史の1ページになります。

シンポジウム：講演 1

第4章は暴れ川をどう制御してきたのか、治水の歴史です。御勅使川扇状地扇頂部に造られた石積出の堤防を紹介します。1947年の航空写真でも扇状地の形状がよく分かります。信玄堤はここです。出しは1~5番堤があり、有野に築かれています。本来は有野村を守り、破損時は有野の人々が補修を担いました。しかしここが突破されると、御勅使川が流れ込み、南方の小笠原方面まで被害が及びます。江戸期文書や発掘・航空写真から御勅使川扇状地全体にいくつもの流路跡が確認できます。つまり石積出は御勅使川扇状地の全域、その上に位置していた22カ村を守る役割を担っていました。また有野村は幕府から特権を与えられ、水下21カ村から人足を徴発できました。現在の言葉で言えば、遠隔地でも「自分ごと化」されており、江戸時代は広域的な水防体制が存在しました。石積出は一番から五番堤が残されています。御勅使川の力は強く一番堤だけでは抑えられないため、複数の堤防で段階的に制御し、御勅使川へ水流をもどす構造で造られ、また五番堤の川裏には水防林（松林）が備えられるなど、現代で言う多重防御のシステムがとられていました。

国指定史跡の調査は計画を立て、史跡整備委員会、文化庁の許可の上で発掘を進めており、現在も三番堤の発掘調査が継続中です。砂礫中から石を使った構造物（石組・竹蛇籠など）を判別します。調査成果を一つだけご紹介すれば、三番堤川表側で平坦に並べられた石葺きと木杭の痕跡が見つかり、その遺構が江戸時代から続く明治時代の「中枿」による根固めだと分かりました。こうした遺構を評価するため、地元（有野）の文書の整理を甲州史料調査会（国文学研究資料館西村慎太郎教授）と共同で行なっていますが、その中には石積出の修復時設計書が残されており、石材、基礎の梯子土台、明治期のボルト使用など具体的な施工方法が明らかとなりました。明治時代、伝統技術を継承しつつ新素材を組み合わせ、洪水から人々を守る工夫が明らかとなってきたのです。

国指定史跡約1900件の多くは権力者の城郭や館跡などですが、河川堤防は全国で3例のみです。このことから御勅使川の堤防の史跡は日本の治水・利水を代表していると言えるでしょう。他の史跡と比較して堤防は地味に見えますが、人の命を守る「命の文化財」として、子どもたちに伝えていきたいと考えています。社会科見学の中では堤防を登り降りし、その高さ8mという規模を体感してもらっています。中には、「これがあったから今のわたしたちが生きている」といった感想を寄せた児童もいて、たいへん感銘を受けました。

第5章は、御勅使川の利水の歴史です。乾燥する扇状地で御勅使川の水は浸透性が高く、根方の上流以外では十分にその水を水田に利用できませんでした。そこで1670年（寛文10年）に釜無川から17kmを導水する徳島堰が開削されました。御勅使川との関係は山梨ならではの、水がなくて苦勞し、また大雨時洪水が起こって苦勞する、それを乗り越えようとした日本唯一のシステムが見られます。かつて御勅使川は川幅が広く、御勅使川からの取水で水田が作れるのは上流のみでした。江戸時代、より広く水田化するため釜無川から引水した徳島堰ですが、御勂使川をどう横断するかが課題となりました。最終的に「箱樋」という暗渠で地下を横断させます。一方下流の六科では御勂使川の河原の中で分水する必要があり、この分水門を守る小さな堤防が必要で、これがご紹介する柵形堤防です。分水門で分けられた徳島堰の水つまり釜無川の水は御勂使川の下を通り、将棋頭が守る堤内地に引き込まれ水田が営まれました。徳島堰と柵形堤防、六科将棋頭の利水・治水のシステムは、国内唯一の構造と考えられ、さまざまな学習・見学に活用しています。

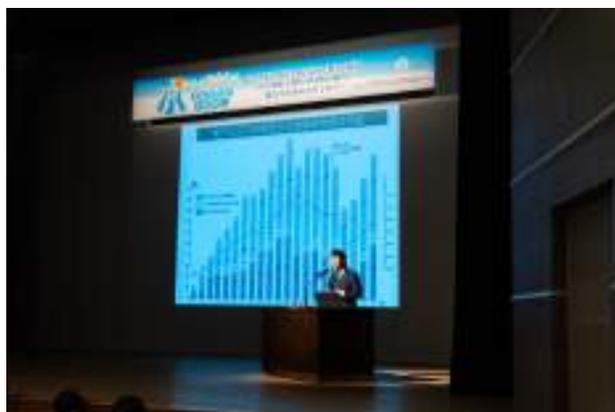
合併前は遺構が雑木林に埋もれ忘れられた状況でしたが、分布調査を実施して遺存状況を確認し、市民とともに周知するウォーキングを行い、国・県補助事業を利用して発掘調査を重ね、その結果遺構は明治40年前後に流失した後改築された姿であることが分かりました。国史跡へ追加指定後、山梨県考古学協会などの協力を得て、小学生も参加する発掘調査や史跡整備工事を行い、現在は一般公開されています。山梨の水との関わりを象徴する場所として、ぜひ訪れてください。

史跡を学んだ地元の子どもたちは発信する力があり、文化財の専門家が集まる史跡の現地視察でも説明をお願いしたところ、児童は劇で「1~5番堤」や「22カ村を守る」仕組みを表現し、多くの来場者が感動されました。

シンポジウム：講演 1

最後まとめに入ります。現在文化財課では南アルプス市の文化財を保存活用するための全体計画を作成しています。その根幹にあるのは水の循環だと考えています。水が地形をつくり、人が暮らし文化財が生まれてきました。文化財を保存活用する上で最も大事なのが連携した基礎研究（サイエンス）です。他地域の考古・歴史学の専門家や土木や水工学など他分野の専門家、例えば山梨大学の大槻先生・西田先生らと連携することで、水循環の大きな視点から文化財を位置づけ直すことができました。防災分野ではデジタル技術を用いた小学校授業を連携して実施し、小学校の社会科副読本には山梨県治水課の協力を得て「流域治水」のページを導入しました。利水面では、徳島堰開削後も乾燥地が残りましたが、昭和40年代の徳島堰から導水したスプリンクラー導入により扇状地が潤され果樹産業が発展し、「原七郷」の評価も前向きに変化しています。

私の勤める博物館の近くでも、大企業が地下水に注目し工場を開設する動きが見られ、それもこの地域と水の歴史の1頁だと思っています。過去を学ぶだけでなく「過去に学ぶ」。技術者と地域の人々の成功と失敗、試行錯誤の歴史を道しるべとして、現代に生かしていきたいと考えています。以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



シンポジウム：講演2

峡東地域世界農業遺産推進協議会 アドバイザー

中村 正樹氏

「営みがつくった世界農業遺産~堰と果物と峡東の風景~」



山々から流れ出た水が扇状地を形づくり、人々が築いた堰が果樹を育みました。自然と人の営みが重なり、峡東地域が世界に誇る果樹王国として発展してきた足跡を紹介します。

◆講演内容

中村正樹でございます。峡東地域世界農業遺産推進協議会のアドバイザーを務めております。しばらくの間、正面のスライドをご覧くださいと思います。

今、斎藤さんから本当に素晴らしいお話を聞かせていただきましたので、私がここで話しているのかと感じておりますが、南アルプス市も峡東地域も、いずれも山梨県に広がる盆地の扇状地という共通の地形に支えられており、果物の栽培が盛んです。スプリンクラーの話も出ていましたが、峡東地域でも広瀬ダムが完成し地域全体に灌漑施設が行き渡るようになりました。そのため、セギの重要性というのが、以前よりも少し薄れつつあったのではないかと考えています。

そこで、この峡東地域世界農業遺産を通して、改めて「堰（セギ）」というものの意味を見直す機会になりました。全国的には「せき」と呼ばれることが多いと思いますが、私どもの地域では小河川を指しており、流れる川全体を「セギ」と呼んでいます。地域の方々は愛着を込めてそう呼んでいます。では進めていきたいと思えます。皆さんの中で「世界農業遺産をよく知っているよ」という方はいらっしゃいますか？もしご存じでしたら手を挙げてください。あまりいらっしゃらないようですね。どこでお話ししても、知っているという方は少ないです。ただ、峡東地域の小中学校で話すと、7割ほどの子どもたちが手を挙げてくれます。

これは国連食糧農業機関、通称FAOが始めたプロジェクトです。世界農業遺産（GIAHS）というのは、環境や社会の変化に対応しながら、何世代にもわたって地域の中で継承されてきた独自性のある伝統的な農業・農林水産業を営んでいる地域が対象となります。

農業というのは人がつくり上げる営みです。そこに文化が生まれます。ランドスケープ、シースケープという言葉がありますが、これは単なる景観ではありません。人の知恵がつくり上げたもの、それがランドスケープ・シースケープです。

そこに農業生物多様性というものが関わり、それらが相互に連携しています。このような地域が、世界的に重要な農林水産業を営む地域として、国連の食糧機関によって世界農業遺産に認定されます。英語では“Globally Important Agricultural Heritage Systems”の頭文字を取って GIAHS（ジアス）と呼びます。

世界農業遺産の認定には5つの基準があります。まず食料が生産されていることが大前提です。食料を作るだけでなく、それが販売・流通することで地域が豊かになる。そして、農業を営むことによって多様な動植物が生息する農業生物多様性が維持されていること。さらに伝統的な知識や技術が守られ、地域文化や社会組織が形成されていることが求められます。

たとえば昔は「セギ普請」といって、地域の皆で力を合わせて水路を直していました。今では「セギさらい」といって泥上げ作業を行うなど、そうした共同の社会組織も大切にされています。このような活動を通じて優れた景観がつけられているのです。

シンポジウム：講演2

日本のGIAHSの基準には、これらの要素に加えて三つのプラス要素があります。一つは災害からの復興力、いわゆるレジリエンスです。もう一つは多様な人材の交流、例えば都市と農村の交流ですね。さらに、製造業や加工業などの第三次産業との連携です。山梨県でいえばワイン産業などがこれにあたります。

峡東地域の場合、長い年月をかけて共同で継承されてきた果樹農業とそれに関連する技術、文化、自然景観が一体となっており、農業を核とした農村全体の営みを指します。これはまさに「システム」であり、地域の暮らしそのものです。

世界では現在29カ国104地域、日本では17地域が認定されています。ここで、ぶどうを例に少し説明させていただきます。ぶどうは、ヨーロッパのジョージアという国、黒海とカスピ海にはさまれた地域で発祥し、西と東に分かれて広がり、やがて各地で作られるようになりました。

例えば中国の宣化では、独特な漏瑚型の棚栽培を行っています。またイランのジョーザン渓谷では、雨が少ないため、ぶどうを株のように育て、自然乾燥させレーズンを生産しています。こうした地域では葡萄栽培の長い歴史があります。

日本では、令和4年（2022年）7月に峡東地域が認定を受けました。日本の他の例を挙げると、「トキと共生する佐渡の里山」があります。棚田を維持することでトキの餌場を守り、人と生きものが共生しています。また、長良川の鶺鴒の文化も水資源を守る思想の中で継承されており、山を守り、川を守る行為そのものが世界農業遺産として評価されています。

ここから、峡東地域についてお話しします。この地域は、フィリピン海プレート、太平洋プレート、ユーラシアプレート、北米プレートがぶつかり合う特徴的な地質的条件の中で形成され、何万年もの年月をかけて山々が崩れ、甲府盆地という日本最大級の盆地ができました。その中で形成されたのが複合的な扇状地です。

峡東地域は複数の扇状地が組み合わさって成り立っています。深い山々から流れ出る笛吹川をはじめ、重川、日川、金川、浅川といった比較的大きな川がいくつも流れ出し、それぞれの流域で扇状地が形成されました。

この地域の土壌は水はけが良く、気候も日照時間が長く、雨が少なくという特徴があります。特に峡東地域は山梨の中でも降水量が少なく、晴天率が高い地域です。こうした条件の中で果樹栽培が発展してきました。

ぶどうについては、先ほど触れたようにシルクロードを経て日本に伝わり、およそ千年の歴史を持つといわれています。江戸時代の甲州八珍果には、ブドウ、ナシ、モモ、カキ、クリ、リンゴ、ザクロ、クルミなどが挙げられています。

この地域では土壌に応じて栽培する作物が分かれています。昔の人は科学的な分類を知らなくても、土壌に合わせて経験的に耕作する作物を選んでいました。その結果、現在のような多様な品種が生まれました。

現在ではぶどうが140品種以上、桃が80品種以上栽培されています。非常にきめ細かい管理方法で栽培されており、小さい面積でも高収益を上げています。世界の研究者が驚くほどです。

ぶどうの棚栽培は勝沼から始まり、日本全国に広まりました。世界的にもこの栽培方式は非常に独特で、評価が高いです。昔は竹や栗の木を使っていましたが、現在では針金に変わり、より安定した構造となっています。こうした変化も「動的保全」の一例です。

シンポジウム：講演2

傾斜地の扇状地でも、農家が自ら技術を持ち、棚を作り、果樹を栽培しています。雨が多い地域では樹を大きく育てる「甲州式棚栽培による疎植大木仕立て」が行われ、ヨーロッパの垣根式とは異なる日本独自の景観を生み出しています。

農業生物多様性も豊かで、さまざまな昆虫や動植物が共存しています。枯露柿生産は400年、ぶどう栽培とともに発展したワイン醸造は140年以上の歴史を持ち、観光ぶどう園も130年の歴史を有し、これらが地域の産業とランドスケープを形成しています。ずっと以前から今と同様の農業形態だったのではなく、果樹栽培に適した気候風土を生かし経験的に適地・適作を行い、養蚕業から転換してきました。こうした農業を支える基盤として、「水」が極めて重要です。扇状地では地形的にかなり上流から水を取り入れる必要があり、河川の上流から取水する「セギ」と呼ばれる水路が整備されてきました。例えば、甲州市塩山の松里地区では、藤木セギ、小屋敷セギ、井尻セギのように笛吹川の水を上流から取り入れ東へ流し、各セギから南方へ水を流していました。江戸後期にはすでに文書に記録があり、1600年代からこうした水路が作られていたことがわかっています。

上流の「小屋敷セギ」から水を曲げながら流し、縦に分配していく方式です。現在でも恵林寺や放光寺の庭園にも水が引かれ、活かされています。江戸時代の水路は現在もそのまま残っています。放光寺の古文書には「用水」としての記録があり、宝永5年（1708年）の村の文書にも水路の存在が示されています。こうして取水された水は、上流から下流まで流れ、現在もきれいな景観の中に残っています。

このセギが維持されているのは、地域の人々が「セギ普請」と呼ばれる活動を続けているからです。地域の役員が区間を分担し、「ここからここまではこの組が担当」というように役割を決め、住民が力を合わせて維持管理を行っています。これは1600年代から現在まで続いている伝統的な仕組みです。草刈りや泥上げなども定期的に行われ、地域の水環境が守られています。

ここからは、日川の砂防の話になります。これはいわゆる砂防堰堤のことで、日川水制とも呼ばれています。図面を見ていただくと分かりますが、流路に沿って畑の中に74本の水制が設けられています。これは大水の際に一気に水が流れ出さないようにするための構造で、段階的に流速を抑える工夫がされています。

明治40年の大水害を契機に、この地域では国の直轄事業として砂防工事が行われました。明治44年から大正4年にかけての事業で、国が正式に砂防を手掛けた初期の例です。畑の中にはT字型の構造物がいくつも作られています。私が子供のころは、農家の方々が「こんな邪魔なものを」と話していましたが、後に研究者の室伏先生がその意味を発見し、これは砂防の歴史的遺構だと明らかにされました。

この日川水制の平面図は、かつて国交省甲府工事事務所の倉庫に保管されていたもので、奇跡的に残っていたといえます。発見されたとき、室伏先生は大変喜ばれたそうです。図面を見ると、縦に3メートルほど下がる段差が設けられ、その前面に石を積んでいます。大水が来ても一気に流れ出さないよう設計されているのです。

これは明治44年から大正年間にかけて工事が行われた当時の写真です。上の方には国宝・大善寺の山門が見えます。勝沼氏館跡付近、上流部の岩場にトロッコを入れて工事を進めた様子が写っています。堤防を築き、水の勢いを抑えるために自然の地形を利用して整備したことが分かります。この写真はこれまでの写真の地域の上方部の勝沼堰堤です。現在の勝沼堰堤は「祇園の滝」とも呼ばれますが、水の勢いを和らげるための堤防が造られました。かつて川は大きく蛇行していましたが、堰堤を作り、水を落とすことで流れを安定させたのです。

シンポジウム：講演2

この話だけでも、室伏先生なら1時間は話されると思いますが、私は農業の側面に焦点を当てたいと思います。明日は現地研修も予定されていますので、詳しくはその際にご覧いただければと思います。

これは堰堤を掘削して作っている当時の写真です。上部に見えるのが甲州街道です。このように上流側には堰堤ができて、水が流れ落ちていく様子が分かります。現在の写真と比べると、滝つぼの部分が深く掘り下がっており、長年の水流で浸食が進んでいることが分かります。

この工事は、オーストリアのホフマン技師の指導のもとで行われました。完成後、流されていた土地は再びぶどう畑として復活し、そこから生産されたぶどうやワインは鉄道によって東京方面へ大量に出荷されるようになりました。

勝沼ではぶどうを運ぶために新しい橋も建設されました。これが二代目の祝橋です。木製の橋でした。さらに三代目祝橋として建設されたのが「祝橋」で通称「眼鏡橋」と呼ばれる橋で、これによりトラックでぶどうやワインを勝沼駅まで運搬できるようになりました。

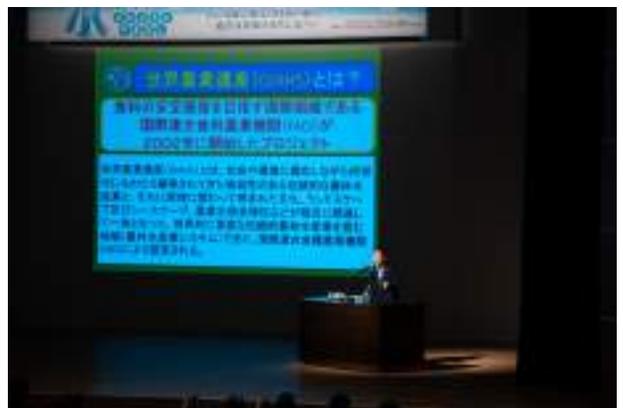
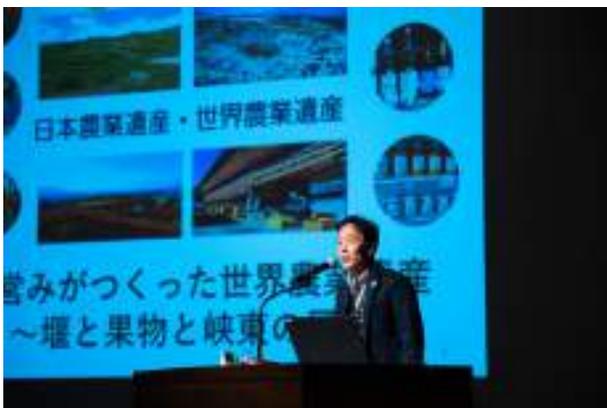
ぶどうの生産量が増えるとともに、天然の葡萄冷蔵庫も設置されました。明治10年には2人の青年がワイン醸造を学ぶためにフランスへ留学し、帰国後、近代的なワインづくりが勝沼の地で始まりました。これが勝沼の近代化の出発点です。農家の方々も自らぶどう酒づくりに取り組み、その風景が今に伝わっています。

先ほどの祝橋付近を上から見ると、河岸段丘の形がよく分かります。大雨で流された場所が段丘となり、その上の鳥居平（とりいびら）にはぶどう畑が連なっています。段丘の下には堰が作られ、太郎セギと呼ばれる用水が流れています。ここで取水された水が下流の畑の間を流れ、灌漑に使われています。この次郎セギも江戸時代から利用されており、現在でも畑の中を流れる水路は先ほどの日川水制地区を通っています。洪水で流されてしまった土地も、治山治水の考えに基づいた工事によって再びぶどう畑として蘇りました。

メルシャンのワイン工場周辺も、かつては川が大きく流れていた跡地です。現在の景観が形成されています。

また、昭和39年の大災害の際には、峡東地域の流域でも大きな被害がありました。その記録映像も残されており、地域の人々はそれを教材として砂防の学習に利用しています。私たちは、こうした歴史を通じて培われた「治山治水」の知恵、そして農業を守り、人を守ってきた地域の力を、これからも伝えていきたいと考えています。

本日は限られた時間でしたが、これでお話を終わりにさせていただきます。ありがとうございました。



シンポジウム：講演3

滋賀県立大学 環境科学部教授

瀧健太郎氏

「できることから始めよう 小さな流域治水のススメ」



流域治水とは何なのか。流域治水について少し視点を変えて暮らし目線でとらえなおすことで、まちづくり・地域づくりであることがわかり、ちょっとワクワクし、それぞれができる「小さな流域治水」をみんなで作ってみたいくなります。できることから始めましょう。

◆講演内容

今、ご紹介にあずかりました。滋賀県立大学の瀧です。どうぞよろしくお願い致します。

「できることから始めよう 小さな流域治水のススメ」ということで、お話しさせていただきます。僕が何者なのか、なぜ滋賀県から来ているのかという点ですが、去年まで金髪にしていました。ときどき怒られることがあったのでやめました。滋賀県庁の土木職員を18年間務め、コンピューターでシミュレーションしてハザードマップを作り、子どもたちと一緒に避難の方法を考えること、特定の場所にどんな生き物がいるかを適地推定しながら自然再生を進める研究、川づくりとまちづくりが一体となった県道の管理などを中心に仕事をしてきました。8年前に大学に移り、研究を続けています。

滋賀県には琵琶湖があります。名前の由来は楽器の琵琶の形に似ているからです。周りを山に囲まれ、真ん中に琵琶湖があり、扇状地の河川がほとんどです。琵琶湖の周りには湿地もあり、地下水位が高く、少し掘ると水が湧いてきます。甲府の土地とよく似たところがあると思います。山の雪解け水が扇状地の河川を通して流れてきます。滋賀県には80本を超える天井川があり、川底がとても高く、湧水になるとすぐに瀬切れしてしまう川です。山梨県の河川は規模が大きい感じですが、琵琶湖（や釜無川）を中心に細かい川がたくさん流れ込む点は似ているところもあると思います。

最近、流域治水に全国的に取り組んでいます。滋賀県でも2012年に流域治水基本方針を定め、一生懸命やってきました。僕は当時、浸水想定区域図（ハザードマップ）を作る担当でした。直轄河川も県管理河川もあり、県内の隣り合う河川の浸水想定区域図も担当しました。すると、氾濫する区域が重なっており、別々に出すより一緒に出した方がいいのではないかという話になります。地域の方に聞きに行くと、「この雨水渠が溢れる」「この農業用排水路がよく溢れる」という話もあります。流域治水を考えるときには、内水も外水も一緒に考えてリスクを評価しないと難しいということで、県庁時代にモデルづくりに取り組みました。

10年確率、30年確率、50年確率、100年確率、200年確率、500年確率、1000年確率と、内水も外水もごちゃ混ぜにした浸水想定を作り、今、公表しています。今年末に2回目の見直しを行い、県から公表されます。確率別の浸水深が分かると、床上浸水がどれくらい起こりそうかという地図も作れます。10年に一回より頻繁に50センチ以上の床上浸水になりそうな場所がどこか、さらに3メートル以上の浸水で家が水没しそうな場所（内水も外水もごちゃ混ぜ）について、200年・100年に一回より頻繁に起こるエリアがどこか、赤で示した地図を公表しています。

最近、滋賀県で行ったような計算をできるプログラムをオープンソース化し、誰でも使えるように公開することも試みています。県庁のときはコンサルに任せており、毎回計算に費用がかかっていましたが、県でも自分でできるようにしています。もしよかったらチャレンジしてみてください。

シンポジウム：講演3

先ほどのマップに基づき、例えば「家屋の水没や流失が20年に一回より頻繁に起こるようなところでは建築規制」「10年に一回より頻繁に床上浸水があるようなところは市街化区域に入れられない」といった条例を2012年に作りました。2014年から10年経ち、滋賀県でもその次の10年を見据えた流域治水を考えはじめています。

「流域治水」と聞くとなんだか大きくて重たく感じるかもしれませんが、実は発想を少し変えると身近なところから考えられます。総動員の流域治水にしようという取り組みをいろいろ考えており、少しご紹介します。琵琶湖も「琵琶湖システム」ということで世界農業遺産になっています。利水の仕組みと治水の仕組みを一緒に考えることが地域の皆さんに響きます。

来年の水シンポジウムは徳島県ですが、ここ数年、徳島県神山町に通っています。吉野川の右支川下流側の支川で、盆地の中を流れ、下流に扇状地を持つ川です。上流の盆地に神山町があります。ここで川の再生をしたいというリクエストをいただき、助言に入っています。地域の人たちが「川を守ることが流域治水」とおっしゃる。はじめは意味が分からなかったのですが、前町長に伺うと、ここは盆地の真ん中に川が流れ、周りが森と棚田。森と棚田を守ることが土砂崩れを抑え、川の水を守る。これが「うちの流域治水」だということです。

神山町には美しい石積みの棚田が並びます。地すべり地帯で、80～90歳の住民に聞くと、崩れるたびに積み、使える土地を少しずつ増やしてきた。水が来るところは棚田、少ないところはスダチや上流で水が来なくなったところはスギ、ヒノキを植えて林業をする。山を守り、田んぼを守りながら川を守る、これが流域治水だと気づかされます。森の管理の有無も川を守る上で非常に大事だと学びました。

近畿地方整備局や四国地方整備局のみなさんと一緒に流域治水の研修を開始しました。先ほどの川に、四国地整や徳島県庁の職員が来て、川を守ろうと小さな自然再生一川の中で魚を増やす取り組みと一緒にいきます。棚田の営農者が減り、守れない厳しい状況や、森の管理の大変さも共有します。徳島県庁の天井川の維持管理担当の方が「川を壊れないようにするために僕も間伐をやります」と研修で手伝ってくれた。壊れた川を直すだけでなく、壊れないようにするために学ぶ。とても流域治水的で、誰でもすぐにできるところが良いのです。

次に、身近な水辺で考える例です。滋賀県の長浜を流れる米川(よねがわ)。豊臣秀吉が最初に5万石の大名となった城下町を流れる小さな川です。扇状地の先端から平野に町が発展し、琵琶湖沿いにあります。湧き水が起源で、街中を流れ、お米を運んでいたのが米川と呼ばれます。市街化が進み、受難の時代を迎えています。県は放水路を造り主要な洪水をそちらへ流すようにしましたが、ゲリラ豪雨に弱い。市街化が進み米川に一気に水が集まり、工場敷地を遊水地にするなどの対策をしていますが、(両側に家が接近し)川を広げるのは難しい。さらに、琵琶湖に直接流れ込むため、これ以上掘っても流下能力があまり上がらない。これを何とかしなければならぬ、まさに流域治水の出番です。

東京ではレインガーデンなど緑が増えていますが、一方、長浜では町家が空き家になり、街中の駐車場化が進んでいます。学生が面積を測ると、集水域の実に17%が駐車場でした。かつては雨庭のあるお屋敷が多く、降った雨をそのまま米川に流さず、できるだけ地下に浸透させていました。駐車場化でそれが失われている。そこで、駐車場を透水性舗装や雨庭にしたらどうなるか、実際の洪水で計算すると、米川の水位が25センチ下がりました。大きな効果です。これを根拠に、地域の皆さんと「雨庭」を街中に作る取り組みを進め、アートの雨庭を米川近くに設置して効果を見てもらい、市役所も駐車場化の際に雨庭を導入するよう指導できないかなど検討しています。

簡単にできる治水対策として、自分でもできるものがあります。一条工務店が「浮いて同じ場所に着地する家」を売り出しています。約100万円のオプションで可能とのこと。激しい洪水には向きませんが、ゆっくり上がって下がる洪水では電気も消えずに大丈夫という実験を見ました。こうした工夫もあります。

シンポジウム：講演3

滋賀県にも霞堤(かすみてい)がたくさんあります。霞堤遊水地を横断するように道路計画があり、盛土で道路を通すと霞堤遊水地の水の行き来が塞がれます。シミュレーションすると、内水排除の機能が強い霞堤だったため、連続盛土にすると水はけが悪くなる。そこで「橋梁形式に」と提案し、流域治水条例に基づく盛土設計ガイドラインで道路管理者にお願いしています。かつて霞堤の場所に新幹線の盛土計画があったとき、地域は「盛土式新幹線絶対反対」と運動し、国鉄に橋梁化を要望したと聞いています。

伊勢湾台風後の新聞記事には、災害復旧の完成を祝う記事の中で「曲がりくねった川が人工的に造られている。幕末の彦根藩主・井伊直弼が手をつけ、屈曲点は霞堤で補強。兩岸はコンクリートブロックで固め、川底を広げて万全を期すが、霞堤はそのまま残す」とあります。現在、この川は県管理河川として50年確率の洪水まで溢れない整備が終わっていますが、それでも溢れる場合を考え、不連続部（開口部）を残す選択がされています。同じ場所で、上流右・下流左。田んぼが開口部になっており、耕作者・所有者が暮らす集落はそこを避けて両側に配置されています。1/50の対策は完了したが、もし溢れるなら民家でなく田んぼ、しかも下流から緩やかに溢れた方が安全ということで、共有地として守られ、例えば「コンビニをつくるぞ」などと合意なしでは売却できない状態にし、見える範囲の小さな流域治水がなされています。滋賀県では今でもこのような霞堤が多く残されている状況です。

神山の石積みでは、一番上が崩れると下の石積みが連鎖的に潰れてしまいます。ひとつ崩れると大きな災害につながりかねません。高校生たちが崩れているところを見つけて自分たちで直す取り組みを始めています。こうした小さな積み重ねが町を守り、営みを守り、暮らしを守り、川を守るのだと分かっています。

皆さんの青い袋の中に『初めての魚の居場所づくり』という本があります。滋賀県庁のどの土木事務所・河川砂防課にも配っている治水の技術本、多自然川づくりポイントブックの入門版です。厚くて難しい本は現場が忙しくてあまり読んでもらえないので、簡単にできる版を作りました。滋賀県庁のホームページで公開しており、万博でも配って大人気でした。小さな自然再生一ちょっとした工夫で流れを変え、魚が増える一を紹介しています。4ページには扇状地と湧き水の秘密も書いてあります。河川管理者向けに作りましたが、中学生や小学生でも分ると評判で、X（旧Twitter）で7万ビューあり、バズりました。

大学に移ってから、研究室の学生が滋賀県庁（河港課、現・流域治水政策室）に話を聞きに行った際、「うちは治水優先なので多自然川づくりはやっていません」と担当者（僕の後輩）が言ってしまう、学生が傷ついて帰ってきたことがありました。普段の河川整備の中で多自然川づくりを考えるのは難しい状況もあります。そこで、県の工事・維持管理の中でも、地域や漁業者でもできる小さな自然再生を普及しようとしています。これは河川技術の裾野を広げるのに効果的です。この本を読んで小さな自然再生を経験した子どもたちは、最初の斎藤さんの講演がとても面白く感じられるはずです。

小さな自然再生の条件は、自己調達できる資金規模、多様な主体の参加と共同が可能、修復と撤去が容易、です（地域でも行政でも同じ）。僕は野洲川の魚道（工費4億円）を設計しましたが、委託費もかけて徹底調査したのに、機能しているか怖くて見に行けません。何年か後に上流でピワマスがたくさん見られるという記事を見て、初めて見に行き、機能していたと分かりました。失敗が許されない事業は怖い。だから、試行錯誤できる小規模なもの、ポケットマネーでもでき、協力を得やすく、失敗してもやり直せるものが大事です。試行錯誤の積み重ねが今を作りました。今の技術者や子どもたちにも試行錯誤を伝えることが次の未来につながるのではないのでしょうか。

この本を出した後、県の土木事務所の人が、浚渫後に石を少し残して植生がつくよう工夫しました。現場代理人と県担当が「この本の通りならこうやったらいいのでは」と話し合い、工事費もかけず、楽しみながら実践してくれました。失敗してもいい。なぜ失敗したかを積み重ねられれば、前向きに進んでいけると考えています。間伐材で魚道を作る取り組みも面白い。

シンポジウム：講演3

僕が知っている一番好きな小さな自然再生は、小学生がロープを垂らすモクスガニの魚道です。修復が簡単で、失敗しても痛くないのに効果絶大。こうした工夫をたくさんやると、子どもたちは南アルプス市の斎藤さんの話がどんどん面白くなり、自分が信玄公になったような気持ちになるでしょう。落差があるところに、市役所環境課と鉄工所が手作り魚道を設置し、ビワマスがジャンプして上がってくるのを見て、土木事務所が本格的な多段魚道を作ってくれた。鉄板魚道が余ったので上にももう一つ作ると、また上がり、さらにもう一つ…と、5年連続で5基整いました。市役所は漁協と一緒に、イクラを子どもに配り、冷蔵庫で育て、稚魚を放流する取り組みもしています。自分の家の冷蔵庫で育ったビワマスがジャンプして戻ってきたら、川が好きになるに決まっています。

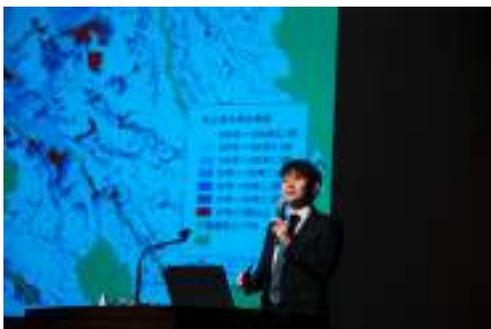
九州・上西郷川（福岡県福津市）では、子どもたちが水制を作るなど、土木技術を学び始めています。みんな土木工学科に行くと思います。大きな石が流れる川で土砂が溜まり、治水が心配という相談があり、小さな自然再生で土砂撤去できないか求められました。20人ほどで剣スコを持って動かそうとしましたが歯が立たない。よく見ると水が当たったところから石がぼろぼろ落ちてくる。そこで水制を作って水を当てるようにしました。その後、副区長さんが毎日30分、崩れた石を水制の先に足していき、2カ月で固定していた土砂がきれいになりました。「こんな面白いこと誰にも言われへん。ひとりでやると石の置き方などで揉めたりせずに、ひとりのひそかな楽しみにしている」とのことで、今も川の石を少しずつ置き換え、土砂が溜まらないように工夫されています。葉っぱを貯める工夫もあります。

滋賀県立大学では、川の自然再生を学べるよう、環境フィールドワークで「落差をなくす」「多様な流れを作る」「川を耕す」を1年生の必修にしています。土のうの作り方も教え、災害現場で役に立つ人材を育てます。水防工法が自然再生にも役立つことを伝え、環境と治水を一緒に学びます。

最後に、環境と治水を混ぜて学ぶ例です。県庁時代から10年通った小学校で、5週連続の取り組みをしました。1週目は川で魚つかみ。食べられる植物を子どもに教えたりもしました。その後、この川が掘り込み、あの川が高いところを流れ、集落がなぜそこにあるのかを歴史から紐解いて説明します。白鳥川の泥水を足元に入れて視界を遮り、何年前前に起きた状況を再現し、「泥水で足元が見えないとどこが危ないか」を子どもに考えてもらう。次に行くまでに、子どもたちは「ここは低いから泥水が溜まって危ない」と教えてくれるようになります。家から学校までの危険箇所を見つけ、子どもハザードマップを作ります。どこで魚が獲れるかなども書かれ、幅広いマップになります。

学習後のアンケートでは「外来種がいて驚いた」「改修をしないと魚にはいいけど僕たちが困る。僕は魚が喜んでいただけの方が良かったと思う」といった意見が出ます。河川改修をしないと護岸を張らないので魚には良いが、洪水であふれると人間が困る。それでも「魚が喜んでいただけの方が良かった」と考える。自分たちが暮らす土地の川づくりを自分事として考え始めています。改修しないことが良いかどうかはさておき、川の恵み、集落の立地、田んぼが広がる理由も理解しつつ、将来、武田信玄の第一歩を踏み出すように、地域の歴史を学び、自分たちで考えられるようになる道筋をつけることが大事です。試行錯誤を重ね、土木工学科へ進学して河川工学や水文学を学び、エンジニアとして地域に貢献する。治水事業も含め理解してくれる仲間が育つことは、10年、20年先を考えるととても大事です。

この学習は、嫌なことと楽しいことを一緒に体験する総合学習なので、何年経っても覚えてくれます。将来、土木工学に進もうと思う子も出てくるかもしれません。ということで、私のお話はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。



シンポジウム：質疑応答

■ 質疑応答

質問者

瀧先生のお話の中に、自分で作れるような川の石積みの水制やバープを作り、魚が住みやすい環境を整えて、実際に魚が住むようになるという取り組みがありました。小学生などにそうした経験をしてもらうのは大変良い試みだと本当に思います。

ただ、ジレンマがあります。そういう小さい構造物は大雨がなければよいのですが、大きな出水があるとすぐ壊れてしまう。斎藤先生の話にもあったように、昔の人たちは山梨でもたくさん構造物を作っていますが、壊れることを前提に作っているのですよね。壊れたら修理に行く——それが治水の本質だと僕は思います。外力は非常に強い。

その意味で、今の土木技術は非常に壊れにくい、コンクリートでがっちり固めるようなものを作ることによって、魚が住みにくい、環境が壊される面がある。一方で、税金で作る構造物は壊れてはいけないというのが役所の考え方です。そこをどう考えるか。難しい問題ですが、先生はどう思われますか？

瀧氏

はい。もう一時期に比べると、少し余地があるのかなと最近と思います。普段の維持管理と新しく作るときでは、責任の重さや「絶対壊れてはいけない」という点にギャップがあると思います。今、注目しているのは維持管理の中で、少しずつメンテナンスをする過程で創意工夫を重ねていくことです。そこには試行錯誤の余地があると感じています。

また、子どもたちが作ったものは出水で流されることがありますが、ときどき残っているものもある。なぜだろうと考え始め、直すのが面倒だと思えば「壊れないものを作ろう」と考える子どもも出てくる。そうした議論が子どもの頃からなされていると、より柔らかく国土を守っていく土木技術を、制度の中に乗せて普及させる道が開けるのではないかと思います。今は難しいところですが、維持管理の「ついでにやる」中のできることから始め、その楽しさを伝え、経験していただくのが今できることだと思います。ありがとうございました。

司会

——他のお二方、今のご質問で一言あれば。

斎藤氏

私は土木の人間ではないのですが、行政で史跡整備を担当しています。公園化するにあたって同じジレンマがあり、なるべく壊れないもの、ランニングコストをかけないものを、伝統的工法に則りつつ、看板は良いものにしたりと、園路には一部アスファルトも使う、といった方針があります。

一方で、市民が関わる部分は安全性を担保するのが大前提ですが、「壊れてもいいもの」も考えています。史跡整備の際、予算が限られる中で、園路と植栽の間に調査で得た自然石を、子どもや来訪者と一緒の一つ一つ積み、石積み技術を学びながら育てていく整備をしています。手作りなので壊れることもありますが、壊れたら次の世代がメンテナンスする。

また、立体模型は壊れないものを作るのが行政の考えですが、展示室の模型は手作りで、子どもや趣味の方と一緒に作り、壊れたら次の人が直す。教育普及につながります。私たちとしては、持続性のあるものと、壊れて継いでいくことで価値を生むもの——そのバランスを試行錯誤しながら進めています。以上です。ありがとうございました。

司会

——中村さん、いかがでしょう。

シンポジウム：質疑応答

中村氏

私は整備する立場ではありませんので、「川を楽しむ」という視点からお話したいと思います。近所に日川という川があります。子どもの頃、もう半世紀以上前のことになりますが、そこは簡単にアクセスできる身近な場所でした。小学校から帰るとカバンを放り投げて釣り竿を持ち、仲間と川へ。じゃぶじゃぶと水に入り、釣りをしたり、石の下に手を入れて魚を捕まえたり。川はまさに友達でした。危ない場所や飛び込み方も、上の学年が自然と教えてくれたものです。今では、そうした川へのアクセスが難しくなっています。整備工事も行われますが、大きな台風でせっかくの施設が流されてしまい、「次はどうするのだろう」と思うこともあります。一方で、小さな自然再生の取り組みのように、人が安全に近づける環境が整うと、川が再び親しみのある場所になります。最近では、温暖化の影響でしょうか、クズなどの植物が繁茂し、昔は見なかった草が増えて、川辺に行くのも容易ではなくなりました。今日のお二人のお話を伺って、私自身が関わるフットパス活動の中でも、地域の自然を楽しみながら、水辺をコースに取り入れられるような環境を整えたいと感じました。以上です。ありがとうございました。



シンポジウム：話題提供 1

サントリーホールディングス株式会社
サステナビリティ経営推進本部(地域共創)
天然水の森グループスペシャリスト

市田智之氏

「『サントリー天然水の森』を通じた水源涵養活動」



サントリーは自然と水の恵みに生かされる企業です。「天然水の森」活動は2003年阿蘇からスタートし、今では全国16都府県26カ所、約12,000haに広がり、国内工場で汲み上げる地下水量の2倍以上の水が育まれています。その良質な地下水を育むため、国内工場の水源エリアで行っている、森林と生物多様性を保全・再生する活動について紹介します。

◆講演内容

ただいまご紹介いただきました、サントリーホールディングス サステナビリティ経営推進本部の市田と申します。本日はこのような機会をいただき、本当にありがとうございます。

今日は、なぜサントリーが森の活動をやっているのかという話をさせていただきながら、具体的な「天然水の森」活動で何をやっているのか、そして山梨県でどういう取り組みをしているのかをご紹介しますできればと思います。よろしくお願い致します。

まず簡単に自己紹介です。今日はちゃんとした格好をしていますが、普段はこういう格好で山の範囲に入っています。経歴としてはサントリーなのでお酒の営業、特に夜の飲食店担当を長年やってきましたが、6年前に今の部署に異動し、この森の活動を続けています。

なぜサントリーがこうした天然水の森の活動をしているのかというところですが、企業理念に「人と自然と響き合い、豊かな生活文化を創造し、人間の命の輝きを目指す」と掲げています。SDGsやサステナビリティは新しい概念というより、この企業理念の本質をより一層追求すること、すなわちサステナビリティそのものだと捉えて活動しています。

皆さんご存じの通り、サントリーという会社は良い水がなければビールもウイスキーも清涼飲料も何一つ作れません。良質な地下水は本当にサントリーにとって生命線です。良質な地下水は元をたどると森で育まれるので、地下水を守るために、工場で汲み上げる地下水より多い水を水源涵養エリアの森で育まないといけない、それが天然水の森の活動のスタートです。

実際、2003年の熊本・阿蘇からスタートし、今は全国で26カ所、面積で1万2000ヘクタールになっています。工場で使用する地下水の1倍だと自分たちだけの分ですが、2倍以上を涵養することで地元への還元と捉え、森林整備の活動を行っています。

この「天然水の森」は「サントリーの土地ですか？」とよく聞かれますが、社有林はほとんどありません。市町村、都道府県、国有林など自治体の皆さんの森を、無償で整備させていただき協定を結んでいるのが大きな特徴です。協定年数も自然相手なので1年、2年ではなく、30年を基本単位として結んでいます。

地図は分かりづらいのですが、実は天然水の森は四国や東北から北にはありません。工場がないからです。あくまで工場で使う水の水源涵養エリアとして設定しているのです。工場がないところは守備範囲ではないということです。

シンポジウム：話題提供 1

もう一つの大きなポイントは、慈善活動でなく基幹事業として捉えていることです。ボランティアは素晴らしい活動ですが、会社の事情で継続しづらい場合もあります。私たちにとっては製品を作る上で一番大事な「水」の持続可能性が最重要です。だからこそ基幹事業の一つとして位置づけ、守るためにお金を出す意味が生まれ、継続できているところがポイントだと思っています。

降った雨がそのまま地下水になるわけではありません。降った雨が土壌で受け止められ、長い時間をかけて硬い岩盤層を通り抜けることでミネラルが溶け込み、私たちは地下深い地下水を製品として汲み上げています。降った雨が製品になるまで約20年かかることが分かっており、長い取り組みが非常に重要です。

きちんと降った雨を受け止めるには土壌が重要です。砂や粘土だけでは水が染み込みにくいので、森の中で有機物（落ち葉など）が加わり、土壌微生物の力を借りて、土がスポンジのようにふかふかの状態になることを目指しています。

（図の）左側のような暗い人工林では日光が入らず下草が生えません。雨が降ると土を直接流してしまふ。適度に間伐して光を入れ、下草が生えるようにすると、雨が降っても土壌を直接流しにくく、傘の役割も果たします。下草が生えることで微生物など多くの生き物が集まり、その力で土がふかふかになる。そうした森づくりを目指しています。そうした森には、猛禽類を頂点とした豊かな生態ピラミッドができる森づくりを目標としています。

そうした中で、私たちは専門家ではないので、本当にいろいろな専門家に入っているのか特徴と思っています。林学の先生だったり、水文学の先生だったり、鳥の専門家だったり、植生の専門家だったり、いろいろな専門家の先生の力を借りながら活動しています。

じゃ、森を整備するとなると、すぐ「木を切ろう」「植樹しよう」となりがちですが、私たちが最も重視しているのは調査です。やはり森というのは場所によって事情が全く違うため、まず今の森の状態を徹底的に調査するところからスタートするので、リサーチのRを取って、R-PDCAサイクルを回しています。

具体的には、森を設定した後、レーザー航測などで樹木の密度を立体的に調査・予察します。予察データをもとに実際に森へ入り、どのエリアにどういう植物が生えているかを把握し、群落のゾーニングを作るところから始めます。

調査結果をもとに、この森を30年、50年、100年後どうするかという、我々は「ビジョン」と呼んでいます。計画を立てます。このビジョンづくりにあたっては、自分たちの土地ではないため、土地所有者の皆さんと協議しながらディスカッションして決めます。経済林として成立しているなら経済林として活用し、このままだと本当にまずいところは林相転換し、逆に自然に任せの方がよいところは任せ等、ゾーンごとに計画を立てて活動します。

実際、計画に基づき施業を行います。私自身がチェーンソーを振り回すわけではありません。地元森林事業体の方をお願いして間伐等を行っています。私たちの活動のイメージとしては、行政や土地所有者と打合せし、この森を「どう切るか」「どう活動するか」という施業方針を現場で打ち合わせをしたり、さらに、これから道を作る場所では「どう道を付けるか」を現場で皆さんとディスカッションしたりして決めたりするので、道なき道に行くこともよくあるかなという感じです。

私たち天然水の担当者は、いろんな専門家をつなぎ合わせる位置づけです。26カ所ありますが、現場を持つ担当は4人ほどです。みな会社にいません。所属は東京・田町ですが、年間100日くらい出張しています。たまに会社に行くと「山から下りてきた」と言われるくらい現場に出ています。

シンポジウム：話題提供 1

今、山で起こっている一番の課題は鹿の問題です。以前から食害の話は把握していましたが、報道は少なくなってきた中で、昨年、滋賀県で起きた土石流災害の原因は、実は鹿の食害が影響であったと報じられ、以降いろいろな場所で食害の話が見られるようになりました。

左の写真は、すごく整備された公園のように見えますが、東京大学秩父演習林の標高1000mほどの山奥で、下草がないのはすべて鹿が食べた結果です。この問題は、鹿が草を食べ尽くして土壌流出が起きることです。さらに、その植物に依存していた小鳥や小動物も植物がなくなる順番に消えてしまいます。鹿は、いまそれほどいないかなと思っていても年率20%ほどで増えるため、一気に増えるのが大きな課題です。

したがって、我々は土砂災害の恐れがある場所になるべく柵で囲います。左が柵の中、右が外ですけど、柵の中は草が繁茂していますが、植樹は一切していません。囲うだけでこれだけ差が出ます。さらに中に草があるので周りで鹿がうろうろし、柵の外側を全部食べ尽くしてしまう条件になってしまいます。彼らも必死なので、近くに切り株があると、それを踏み台にして飛び越えて中に入ったりだとか、イノシシが柵の下を掘ると、その穴から中に鹿も入ったりしてしまいます。なるべく電波が届く所は通信型センサーカメラをつけて様子を見ています。作業道から柵を腹で押しつぶして入ることを覚えてしまう個体もいます。右側が植樹した後ですが、夜中じゅう中にいて、昼になると外に出てきます。まずいので、柵をかさ上げしたんですが、それでも関係なしに入られます。最終的にここまでやるとさすがに入らなくなったという具合で、かなり大変な取り組みです。

さらにこの動画、真冬の秩父演習林ですが、鹿が落ち葉を食べています。緑がなくなると鹿は減ると言われていましたが、落ち葉を分解する菌が入った土を体内に取り込むことで落ち葉も分解できることになると、真冬でも餌が豊富にある状態になるため、なかなか減らないだろうということになります。実際に鹿の糞のDNA解析をして頂いたところ、やはり冬場にカエデ類やミズキ類が多いことが分かり、落ち葉を食べている証拠になっています。非常に大変な課題です。

なので、なるべく鹿を増やさないことも非常に重要です。植樹や間伐材をそのまま残すと全部、餌になってしまうため、なるべく柵で囲うことをしています。柵の外では鹿が食べない不嗜好性植物（例えばミツマタ等）を植えて土壌を覆って守ることもしています。最終的には密度調整が必要だと思いますが、サントリーが鹿を撃っているというたいへんなことになるので、行政の方々をお願いしている状況です。そういった3点セットが非常に重要だと考えています。

山梨での取り組みは県内に2カ所あります。まず1つは白州の水工場・蒸留所の裏山、南アルプスになります。このスタートは2008年に協定を結ばせて頂き、さらに2019年に山梨県有林さんと協定を結ばせて頂いて、今は2000ヘクタールに広がっています。もう1つは小菅村にあります。こちらは東京の武蔵野のビール工場や多摩川の食品工場の水源涵養域として設定しています。

南アルプスは皆さんご存じのとおり急峻なところであり施業をするのも大変なエリアのため、どちらかというと研究によく活用させていただいています。弊社には水科学研究所があり、水文学の研究部隊がいますが、現場に入って調査研究をしています。この右側ですね、フィールドワークから構築された地下水のシミュレーションモデルを作っています。いわゆる国土モデル的なものでGetFlowsのようなものがありますが、実際に現場に行き、現場とモデルの違いの対話を繰り返しながら地下水の見える化のモデルをいま作っています。こちらがまさに地下水の流れを表していて、例えばある地下の断面を切ったら地下水がどう流れているかといったことをシミュレーションモデルとして把握することも行っています。

それ以外にも、ホクギノ平では、斜面がむき出しになっているので、特に花崗岩がむき出しになっていると、この花崗岩が風化してどンドン土砂災害が起こったというエリアであるため、階段状に土留め工をして、そこにネットを張り、さらに地域性の苗木を植樹することによって補修しています。10数年かけてようやく緑が戻ってきている状態です。

シンポジウム：話題提供 1

さらには、2019年に山梨県さんと協定を結んだ際、山梨総研さんと鹿の行動調査も行いました。右図はニホンジカがどの時間帯にどのあたりにいるかを色で示したもので、オレンジが昼間、青が夜中～明け方にいる場所を表しています。実際、ここがうちの工場ですが、夜になると工場の方に降り、昼になると裏山に上がっている様子が分かります。さらには、GPSをつけて行動範囲を調べたところ、ここが蒸留所のところですが、長野県側まで移動する個体もあったり、日向山、白州蒸留所周辺、雨乞岳周辺などコアになるエリアが見えてきたりしました。これをどう報告しようかというところは、山梨県の方々と協議をしながら、まさにこのエリアを重点地域に加えていただきながら活動しています。

今日は簡単に我々の活動をご紹介しました。基本的には「水と生きる」という企業理念のもと、そうした活動をもとにサステナ活動をしながら、最終的にはやはりブランドにつなげることで活動しています。今日は、こうした活動のあくまで一事例のご紹介くらいでしたが、弊社の天然水の森のホームページのところに、さまざまな活動を掲載させていただいております。例えば、作業道の作り方の活動、出てきた材の活用、さらには地元の商業学校との取り組みなど、いろいろな活動を掲載していますので、またご覧いただければと思います。

簡単ではございましたが、私からの説明は以上になります。本日はご清聴いただきありがとうございました。



シンポジウム：話題提供2

株式会社コーセー 経営企画部サステナビリティ戦略室

田口 陽子氏

「コーセーグループサステナビリティ戦略と水の取り組み」



コーセーグループのサステナビリティ戦略と自然関連に関する情報開示 (TNFD)において実施した生産拠点における水の依存と影響の診断やリスクと機会の評価について、そして水に関わるコーセーグループの取り組みをご紹介します。

◆講演内容

ただいまご紹介いただきました、株式会社コーセー経営企画部 サステナビリティ戦略室の田口と申します。この度は、このような機会をいただき、本当にありがとうございます。

私からは、本日、コーセーグループのサステナビリティ戦略と水の取り組みについてお話しします。どうぞよろしく願い致します。

本日の内容は、まず会社の構成のご紹介、次に弊社が掲げる中長期ビジョンとサステナビリティ戦略、最後に水の取り組みについてという、この3つについてお話いたします。

まず会社の紹介です。当社は1946年に創業し、今年で79年目を迎える化粧品会社です。現在、39の化粧品ブランドを展開し、67の国と地域で事業を展開しています。創業以来、「理を通じて、人々に夢と希望を与え続けること」を常に心に留めて事業活動をしてまいりました。

1991年にはこの思いを明文化し、「美しい。知恵、人へ、地球へ」という企業メッセージを掲げました。このメッセージは企業メッセージであると同時に、コーセーサステナビリティ戦略の指針としても用いられ、全社員の行動の根底となっています。さらに、創業者の座右の銘である行動憲章「正しきことに従う心」という言葉は、サステナビリティ戦略の基盤となるポリシーとして位置づけています。こちらは当社のブランドポートフォリオ（ブランドマップ）です。最上段は「最高のクオリティを最高のサービスでお届けするようなハイプレステージブランド。中段はブランドごとに個性を出しながら、より多くの方に高付加価値の商品を提供するプレステージブランド。下段は、優れた商品を手頃な価格で提供するコスメタリーブランドと区切っております。年齢・性別・肌のタイプ・テクスチャーといった嗜好だけでなく、その人の価値観も含め、さまざまなお客様のニーズに対応できるよう多様なブランドを展開しています。

以上が会社概要です。

続きまして、会社の中長期ビジョンと、その中のサステナビリティ戦略についてご紹介いたします。コーセーグループは昨年11月に、中長期ビジョン「Vision for a Lifelong Beauty Partner -Milestone2030」を発表し、その中で2030年の構成グループのありたい姿として「Your Lifelong Beauty Partner」を掲げました。

この実現に向け、事業活動としての価値創造と、企業の基盤、社会・環境の持続可能性というところのサステナビリティを掛け合わせ、これをベースに会社の事業戦略・顧客戦略・地域戦略の3つに取り組み、ありたい姿の実現を目指します。本ビジョンにはサステナビリティが戦略として組み込まれており、企業経営の中核の一つとして位置づけています。

シンポジウム：話題提供2

先ほどの「ありたい姿」を実現するために、重要課題を多方面から特定し、「事業基盤」「人に寄り添う」「地球に寄り添う」の3軸で整理しています。サステナビリティ戦略は、「人に寄り添う」「地球に寄り添う」といった社会・環境領域の重要課題解決に向け、価値創出や企業基盤に関わる戦略を強化する役割を担っています。各重要課題には具体的な目標値や取り組みを設定し、推進しています。具体的には、サステナビリティ戦略の中に6つのテーマがあります。

最後に、弊社の水の取り組みです。まず、化粧品は水と深く関係があります。水そのものが化粧品の原料として入っていますし、植物や花のエキスが入っておりますが、これらを育てるときにも水を使います。製造・生産でも工場でも多くの水を使い、商品をお客様がご自宅で使用する際（洗顔・シャンプー等）にも水やお湯を使います。このように、化粧品と関わりのある水は、事業活動において欠かすことのできない重要な資本資材と捉えています。

企業には自然資本への取り組みが多方面から求められています。企業活動は自然資本に依存し、影響も与えるため、自然資本に対する情報開示や取り組みが求められています。弊社も自然資本に関する情報開示に取り組み、2024年に「コーセーグループ TNFDレポート」を発行しました。本レポートでは、事業活動で特に重要な自然資本と位置づける「水」に着目し、そのリスクと機会を評価しています。以下、内容を簡単にご紹介します。

このレポートは「ガバナンス」「戦略」「リスクと影響の管理」「指標と目標」の4本柱で開示することが求められています。戦略の中では、LEAP分析のアプローチを用いて分析しました。今回は水について行った分析をポイントを絞って説明します。

まずLEAPのL (Locate) として、自然との接点を見ました。事業活動の中で最も水と関わりが大きいのは工場です。複数拠点の工場周辺地域の自然の状態や、水・生物多様性のリスクを、さまざまなツールを使って評価しました。エリア特性を踏まえて評価・確認した結果、弊社の事業活動において「群馬工場」を最も重要な拠点と位置づけました。

次にE (Evaluate) では、この重要拠点である群馬工場における水の依存と影響を分析しました。自社が使っている上水や地下水の量、どこから来ている水か、といったリスクや機会を分析しました。一方で、周辺生態系に関する情報が少なく、十分な分析ができなかった点が壁になりました。この「分からないこと」もレポートに明記しています。外部の環境団体が出すTNFD開示でも、分からないことを分からないと開示する姿勢がステークホルダーに対する透明性の確保として評価される点でもあります。今後、この点にどう対処するかを課題として捉えています。

最後にA (Assess) では、リスクと機会を評価しました。各リスク・機会について、影響の程度や影響が出る期間等を定性評価でまとめました。これまでの分析を踏まえ、今後の対応策も検討しています。弊社の水にまつわる取り組み例をいくつかご紹介します。スキんケアブランド「雪肌精」においてサンゴの保全活動に貢献しています。LEAP分析を行った工場では、環境省の水質調査の実施に協力し、地域の環境保全につなげています。直接水そのものではありませんが、子会社アルビオンで河川域のクリーン活動を実施したり、植樹活動も行ったりと、コーセーグループ全体で水に関する取り組みを進めています。

最後に――冒頭に述べた「美しい。知恵、人へ、地球へ」という思いのもと、水についても責任ある利用と持続可能な水資源の確保をしっかり目指し、今後も会社として取り組んでまいります。少し長くなりましたが、私の講演は以上です。

ありがとうございました。



シンポジウム：話題提供2

株式会社コーセー 執行役員生産部部長

黛 博道氏

「豊かな水を求めて探し当てた山梨への想い」

安全性と品質の高さより、世界中で評価されるMade in JAPANの化粧品市場拡大に向け、山梨県南アルプス市に新工場建設します。社内では、『化粧品は水が命』・『工場探しは水探し』という言葉が語り継がれ、今回、化粧品と親和性のある豊富な水資源と自然環境を探し当てた経緯を紹介します。



◆講演内容

コーセー生産部の黛でございます。

本日は「豊かな水を求めて探し当てた、山梨への思い」ということで、私から報告させていただきます。

まず簡単に自己紹介ですが、私はこのコーセー一筋で33年間、化粧品一筋で取り組んでまいりました。部署はいろいろ経験しておりますが、その経験をもとに、化粧品をどうアピールしていくかという観点から、今回の山梨の工場につなげていければと考えております。

こちらは9月末にドローンで撮影した、当社の工場の写真です。まだ建設中ですが、来年2月に建物が完成し、実際に商品を作り始めるのは来年7月の予定です。現在、建築と従業員の訓練を着々と進めております。

本日は男性の方が多くかもしれませんが、化粧品は国内だけでなく海外にも輸出しています。メイド・イン・ジャパンの化粧品は、世界中で安心・安全という信頼をいただいています。私たちは2030年までに売上を約1.5倍に高める目標に取り組んでいますが、日本国内のお客様だけでは達成できません。広く世界中のお客様に、私たちの化粧品をお届けしたいと考えています。その供給のために工場が必要で、工場探しを始めました。

創業者の言葉に「化粧品は水が命。工場を作る時は工場探しは水探し」というものがあり、社内で語り継がれています。山梨にたどり着くまでの経緯を少しお話しします。

環境省の「名水百選」は、私が日本中で良い水のある場所を探した際のバイブルでした。そのリストと、不動産・デベロッパー各社からの情報をもとに、名水の土地で工場が建てられる場所を全国の工業用地から探し、10カ所以上を現地確認しましたが、なかなか「ここだ」という場所が見つからず、1年以上探し続けました。山梨県内の候補地もありましたが、条件が合わず決定に至りませんでした。

そんな折、今回の工業用地が売りに出るという情報があり、すぐに検討。経営層にも現地を見てもらい、「これは良い」と短期間で決定しました。短期決定のきっかけは、土地の初期情報に地下水の掘削データが付いていたことです。深さ150メートル付近の水量データも添付されており、非常に魅力的な工場用地だったため、すぐに購入しました（2019年）。

シンポジウム：話題提供2

まず、山梨では水素が活用できる。米倉山で製造される水素エネルギーを供給いただき、製造に使えるということで採用。続いて、県内の水力発電「新やまなしパワー」（CO₂フリーの電力、まさに水の力で生まれた電力）の利用。さらに、日照時間の長い甲府盆地を活かした太陽光パネルの設置。最後に、地下水の活用——サステナブルな化粧品づくりをこの場所で実現する、という流れで進めてきました。まさに「地産地消のエネルギー」で化粧品が作れる。メイド・イン・ジャパンに加え、プラスアルファの付加価値が付けられると考えています。もちろん、水を使うだけでなく、新工場として水の効率化、排水のリサイクル、雨水の利用にも取り組み、地元の大切な水を活用していきます。井戸水位のモニタリングも行い、管理していきます。

加えて、山梨県庁に相談したところ、山梨大学の中村先生（本日会場にいらっしゃると思います）をご紹介いただきました。水にこだわりたいという思いから、「どの辺で降った水が我々の地下水につながっているのか」「そのエリアをどう守るのか」。サントリーさんほど大規模でなくとも、初歩的に何ができるか教えていただきたい、と相談したところ、思いを理解いただき「一緒にやろう」と。3年前から研究にお付き合いいただいています。

研究初日には水素の同位体について教えていただき、いきなりハードルが高く感じましたが、丁寧にご指導いただき理解を深めています。現地の水源調査にも同行し、採水した水でコーヒーを淹れて皆で飲む、といった楽しい経験もしながら、和気あいあいと、かつ実態把握ができる研究を進めています。現在、大学の学生さんにも水源調査をしていただいています。地下水の水源は南アルプス側から流れてくる、という大枠は理解していますが、「冬に降った雨の寄与が大きい」「雪解け水に近いのでは」といった仮説を立て、具体的な解析に着手いただいています。もし雪解け水の寄与が大きくなれば、当社のブランド「雪肌精」との親和性も高く、付加価値が高まります。この研究に大いに期待しています。

来年6～7月に稼働・お披露目を予定しており、その際に研究成果を中村先生から発表いただきたい——ここで少しプレッシャーをかけつつ、ぜひお願いしたいと思います。

山梨で工場を作ることで、産官学の皆さまにご協力いただき、このような建設計画を立てることができました。心より感謝申し上げます。これからさらに、この存在価値を日本中、そして世界の皆さまに「メイド・イン山梨」「メイド・イン南アルプス」の化粧品としてお届けできるよう進めてまいります。引き続きご支援・ご指導のほど、よろしくお願いたします。

簡単ではございますが、ご清聴ありがとうございました。



シンポジウム：話題提供3

山梨大学 国際流域環境研究センター教授・一般社団法人 小さな水
西田 継 氏

「寄せ水・寄せエネ、普段にも災害にも」

「小さな水」とは、「水をはじめとする地域資源を理解、保全、活用するため、住民と関係者が協力して相互扶助の文化を育むこと、そこから生まれる機能と経験の価値を深めることに関わることで、地域の福祉に寄与する」ための活動です。ここでは、山梨県や奥能登での分散給排水システムの運営や導入の事例を紹介します。



◆講演内容

皆さん、こんにちは。3つ目の会社の話題提供ということで、サントリーさん、コーセーさんに続いて、比べものにならないほど小さく未熟な会社ですが、「小さな水」という一般社団法人の代表を務めております西田継といいます。

今日は、その流れで、私たちの会社をつくっている周辺の活動をご紹介します。ここにご紹介いただいたように、山梨大学の流域センターというところで、30年近く勤めております。その立場から少し広めの話をご紹介できればと思います。よろしくお願いします。

「寄せ水」の前に、少しご説明します。ここでは「小規模水システム」と呼びます。蛇口をひねればほぼ日本中で水が出る、自治体の水道事業者から配られている非常に便利な社会に暮らして数十年が経ちました。一方で、山中や人口密度の低い地域では、ご自分たちで水を運営し、水源の管理をされている方々もいらっしゃいます。これをここでは小規模水システムと呼びます。

少子高齢化が進み、地震をはじめ多くの災害が毎年のように起きる厳しい状況です。こうしたものが中山間地域、そこで暮らす人々の上ののしかかっています。下の写真は左も右も甲州市。左は農業用水を皆で分ける昔ながらの施設、右は集落で自営の水道を大切に管理している例ですが、その管理をする人が少なくなっています（高齢化・人口流出）。全国的には、小さいところは統合・広域化が進んでいます。私はこれまで上水道側の仕事が多かったのですが、そうした流れがあります。

こうした中、ここに見えている方々の何人かにも協力いただき、7年ほど前に「小さな水」という活動を始めました。事業名はもっと長かったのですが、最近は「小さな水」と呼んでいます。3月で政府事業は一旦終了し、引き続いて一般社団法人を立ち上げ、事業時のニックネームを団体名にしました。簡単にいうと“見える化”です。輪の左上にピンクで「小さな水」と書いてあるのが自営の水の仕組み。右下のピンクの「大きな水」が上水道・下水道など既存の公共インフラです。小さい／大きい線引きは難しくグレーゾーンがありますが、日本の人口の数%が小さな水を使って暮らしていると言われます。私たちは公共インフラに対抗したり独立国を作る活動ではありません。災害で大きなインフラが壊れる現実を経験しました。その中で何ができるかを考えた一つのアイデアが「小さな水」。両立・共存する暮らし方を模索するのが大きなテーマです。

下の図にあるように、「大きな水」と「小さな水」が共存する社会を描くことが一つ目。二つ目は、実際にそんな暮らしができるのか、住民と試してみる活動を同時に行うことです。

左上の写真は甲州市のある山村で、自分たちで水を使っている方。最近組合長が交代しましたが、30年ほど切り回してこられた方です。某有名テレビ局のディレクターとして世界中を回り、水の大切さに気づき、仕事の終わりに近づいたとき住み家を探し、山梨県甲州市に決めたとのこと。理由は「人の結びつきを一番感じたから」。私は静かな暮らしを求めているのかと思っていましたが、人を求めてやって来たという話は衝撃でした。水は人を結びつける。社会学でいう有機的連帯の条件を教えてくださいました。

シンポジウム：話題提供3

今日のタイトルにある「寄せ水」は私の造語です。二つの意味があります。①組み合わせる＝寄せ木細工の“寄せ”を水でやる。②対象を手元に引き寄せ距離を縮める感覚。上は多元、下は手元感と捉えられます。

能登半島地震の例です。写真は上水道の様子。ここは標高は千メートル未満で平坦、林業を志す若い移住者も多い地域。貯えられた水が十数キロ下の輪島の河口付近まで流れ、ポンプを中継して再び上げて戻す水道構造でした。これが破断。公民館を中心にタンクが設置され、自衛隊などが補給。10～20Lのタンクを運ぶのは大変で、車のトランクへ載せるのも一苦労。現場でそれを実感しました。

排水は下水道区域外で浄化槽。多くの浄化槽が地上に“タケノコ”のように盛り上がり、入口・出口が破断。トイレは使用禁止となり、公民館に通う生活が数日～数週間続きました。仮設トイレが整備されても、氷点下で外へ行く負担、防犯の心配など課題が続きます。「仮設があれば何とかなる」は1～2日ならともかく、1週間は難しい——この実感がありました。

毎月通う中で考えたことを三つに集約します。①救援物資は運ぶには大きく重く、使い方も難しいものがある。②普段から運びやすく設置しやすい“小さいもの”があればよかった＝多元・分散。③いざという時だけでは使えない。普段から使っておき、限界や使用感への信頼を持つ必要がある。現在、国交省などで「給排水一体」「分散給排水システム」という言葉が出ています。私たちの「小さな水」を難しく言えばそれです。いくつかのパーツに分かれます。

隣の展示ブースに水をろ過する機械を展示しています（“ろ過”）。そもそも清らかな水源に集落が形成され、都市化していく——人の暮らしと水は本来一体。これを“体感”し直すのが「探そう（探査・探索化）」。見つけた水を住まいへ“寄せる”のが「取ろう（取水・取り込み）」。ろ過して使い、必ず汚れるのでできるだけきれいにして返すのが「返そう（海藻化＝還元）」。下水処理水や浄化槽処理水よりも清浄にして地域へ返したい。これらを実現するには人をつなぐコーディネイトが必要で、それが「つなごう（人をつなぐ）」です。これらを一体として一般社団法人「小さな水」で事業化しています。

「サガソカ・トロカ」の例。左は人が入れるほどの横井戸に入ると、石で作られた水槽があり、昔使っていた形跡があるが今は不使用。中央は30～70年使われ、移住者が管理してきたが、崩れで出が悪くなり、新たに右写真のような取水設備を自分たちで作った例。右は珪藻土の半島。地震で肌が露出し、2024/9/21の大雨以降も白濁が流れ続ける場所。中村さんチームで濁りの少ない湧きを探したところ、昔の水源だったという話と符合しました。

「ろ過」は、当初は国内大手化学メーカーと共同研究し既製品（左）を能登に持ち込みましたが、真ん中のサイズに小型化し、さらに右のキャリーケースサイズまでダウンサイジングしました（会場展示）。「返そう」は、甲州市の住民宅や奈良でも実施。ダウンサイジングして“いつも使う（フェーズフリー）”形へ。

「つなごう」は、山梨・高知・奈良・石川・カンボジアなど国内外で活動をつなげています。3年前から北杜市の方が自主開催している「すいどう塾」では、水についてボトムアップで学び、今年は専門家・技術者の育成も視野に運営しています。

住民と水を引き寄せる活動を続け、いろいろなタイプの水を“使い合わせる”ことを見てきました。フェーズ（時間・場所・制度）をほどき直す時期が来ているのでは、と考えています。タイトルに掲げた「寄せエネ」の話は時間がなくなりましたが、機会があればご紹介します。水素をつくる試みも始めています。この後も一緒に。



シンポジウム：質疑応答

■質疑応答内容

質問者

面白いお話をありがとうございました。今回のセッションでは、皆さんが企業の活動として、地域や自然とどのように関わっていくかをお話してくださいました。そこで、地元に入っていき際に苦労されたこと、あるいは意識しておられたことを、改めて教えていただけますでしょうか。

司会

全員の方にお答えいただきます。簡単に一言ずつお願いいたします。――では、サントリー市田様からお願いします。

市田氏

我々は2003年から取り組んでいますが、当時は「サントリーが山をやる＝買い占めに来たのでは」という声もあったと聞いています。まず地元の方に丁寧に説明すること、皆さんの目につく場所からの整備・管理に着手すること、そこからスタートしました。そうした苦労は長年あったと聞いています。

司会

買い占めに来たと言われたのは厳しかったですね。では、黛様お願いいたします。

黛氏

最初から県や南アルプス市の皆さんが、非常にウェルカムな姿勢で話を聞き、相談に乗ってくださり、ネットワークにもどんどんつながっていただきました。そのおかげで、地元の雰囲気や習わしを少しずつ学ぶことができ、最終判断にもつながりました。障害は特になく、スムーズに進んだと思います。

司会

それは良かったです。――西田さん、いかがでしょうか。

西田氏

障害だらけでした。日本で生まれ日本の大学に勤めていますが、今日ご紹介したような取り組みを始めたのは海外でした。10年ほど前、先輩に連れられてネパールへ。その前はバングラデシュにも行っていました。初回は調査で互いに物珍しさもありましたが、3回目くらいで不穏な空気を感じ、退避したことがあります。研究者が仕事を“搾取”していくように見えたのかもしれない、と大反省しました。

その後ベトナムやカンボジアでも、3回目の訪問で村長さんが酒席で涙を流され、胸に詰まるものがありました。

司会

地域の風習や文化的風土はそれぞれで、さまざまな経験を通して、今の場所でやりたいことを、水を活用しながらご一緒できているのだと思います。ご質問の方、よろしいですか？――ありがとうございます。では、最後のご質問です。お願いいたします。

シンポジウム：質疑応答

■ 質疑応答内容

質問者

サントリー様に伺います。先ほど「汲み上げる地下水の2倍以上の水を涵養している」とのことでした。自然の降雨はコントロールできませんし、何をもって2倍になったとか、評価しているのか教えてください。

市田氏

当社の水科学研究所で、地下水の流動モデルを用いて計算しています。過去約20年分の降雨データをモデルに入力し、土壌条件などを組み込んで、どれくらい浸透するかを計算します。査読論文としても発表しています。全国で「当社が使用する量の2倍」を基準にしていますが、南アルプスは地下水が非常に豊富で、協定している約2000ヘクタールのエリアでは、さらに2倍以上の涵養ができていると計算されています。細部は難しい点もありますが、概要は以上です。

司会

ありがとうございました。ローデータは膨大だろうと拝察します。——お時間になりましたので、質疑応答は以上といたします。ご登壇の4名の皆様に、今一度大きな拍手をお送りください。



パネルディスカッション①

■ パネルディスカッション

- ・ ファシリテーター：滋賀県立大学環境科学部 教授 瀧健太郎氏
- ・ パネリスト：齊藤氏、中村氏、市田氏、薫氏、西田氏（計5名）

ファシリテーター（瀧氏）

早速、パネルディスカッションを始めます。

齋藤さんからは歴史的な治水・利水の仕組み、地域をいかに使える土地にしてきたか、そして新しい知見について伺いました。中村さんからは世界農業遺産の話だけでなく、葡萄づくりが千年前からのものではなく、変化の中で生まれてきたこと、「動的」というキーワードで、変わりながら歴史を守り、農産物を育て、世界農業遺産に至るプロセスをお話いただきました。サントリーの市田さんからは、企業理念に基づき、汲み上げる水の2倍を涵養するという強い決意と実践、新たに山梨に工場をつくり、地域とともに風景と歴史をつくっていく話。コーセーの薫さんからは、これからワクワクしながら一緒につくっていく仲間としてのメッセージ。飲料だけでなく化粧品も水を使っており、水を守る仲間に加わってくださること。西田先生からは「小さな水」。昔は使われていたが今は使えない水源を、小さな水として回復する、古くて新しい取り組みについて伺いました。

では質問です。まずサントリーの市田さん。企業理念とはいえ企業です。理念だけでは済まされない部分もあります。2003年からの取り組みを基幹事業としてやり続けられる動機や、立ち上げ・現在の課題について教えてください。

市田氏

天然水の森の活動は2003年開始で約20年です。背景には1973年に始めた愛鳥活動があり、50年以上の歴史があります。社内資料にも「サントリーは農業である」と明記され、自然の恵みをいただいて事業を行う姿勢が根付いています。これが水の活動につながりました。

新入社員には2年目に森林整備体験研修を実施します。1年業務を経験した後に体験することで、自分の仕事と自然保全のつながりが腑に落ちます。

直面する課題は、温暖化に伴う病虫害（松枯れ、ナラ枯れ等）の拡大、そして自然相手ゆえ思い通りにいかないことが多い点です。大規模に一気にやるのではなく、小面積でトライし、モニタリングしながら進めることを大切にしています。

ファシリテーター（瀧氏）

ありがとうございます。続いてコーセーの件です。TNFDへの積極的な取り組みの動機、踏み切る際の苦勞、直面する課題を教えてください。

薫氏

直面する課題は、業界トップ企業（資生堂、花王、海外ではロレアル、エスティ・ローダー等）が先進的に取り組む中、規模の小さい当社が同水準の目標をどう達成するかです。

社内では「工場の水使用量削減をより加速してほしい」との要請があり、リサイクル率向上など費用対効果を踏まえた解決が課題です。エネルギー面は山梨県からの提案（再エネ等）で目処が立ちつつありますが、次の課題は水です。TNFDで示した不確実部分の把握・改善も進めたいと考えています。

パネルディスカッション②

ファシリテーター（瀧氏）

ありがとうございます。ここで斎藤さん・中村さんに伺います。歴史的な治水・農業の積み重ねと、気候変動など現在の課題の中で、地域に新しい仲間や次世代が加わるにあたり、歴史にどう学び、変化にどう活かすか。中村さん、斎藤さんの順でお願いします。

中村氏

私たちは「フットパス」という、地域を歩いて楽しむ活動を行っています。ガイドとして、世界農業遺産に関わる歴史や、その土地ならではの“匂い”を伝えることを大切にしています。ネットで得られる情報だけでは十分ではなく、地域の人々の実体験——たとえば「この川でウナギを捕った」「洪水のときはこう行動した」といった記憶——と結びつけることで、参加者の関心がぐっと高まります。学校でも、現場に足を運び、過去の出来事が今の暮らしにどう生かされているのかを学ぶことの大切さを伝えています。たとえば舞鶴城（甲府城）にあるオペリスグ*の由来をたどると、そこには大災害からの復興と恩賜林の歴史にたどり着きます。こうしたエピソードを通して、甲府盆地がいかに災害を乗り越え、産業を広げてきたのかを伝え、未来をともに考えていきたいと思えます。

*甲府城跡内にある記念碑である「謝恩碑」のこと。明治40年の大水害など度重なる水害によって荒廃した山梨県内の山林に対し、明治天皇より山梨県内の御料地の下賜が行われたことに対する感謝と水害の教訓を後世に伝えるために1922年（大正11年）に建設された。

斎藤氏

南アルプス市では、（指定文化財だけでなく）道端にある石造物、水害碑、農業景観などもまるごとひっくるめて「ふるさと〇〇博物館」として地域の魅力だと考えています。その根幹として水の循環があり、人の記憶（おじいちゃん・おばあちゃんの記憶など）もアーカイブ化し公開しています。

子供達との交流の中で、知識は伝えても忘れてしまいがちですが、記憶に残すということを大切にして「伝えたこと、その魅力を今度は君たちが誰かに伝える番だよ」と子どもたちに伝えていきます。そうすることによって子どもたちが未来に繋がって、水とか川とかについて考えるきっかけ、答えを出すというよりも考える力を育てていければいいなと考えています。今までも学校や農業団体、市民、まちづくりの団体などの方々との連携をとる中で、歴史文化に興味をもっていたら、それを共に伝えていく。この繋がりがこそが宝だと考えています。今回も土木学会さん、サントリーさん、コーサーさんとの新たなつながりで、南アルプスの水の魅力を、治水・利水よりも大きな視点で考えていくことができる、それを子どもたちや地域へつなげていける。そんな未来が拓けたなと考えています。

ファシリテーター（瀧氏）

ありがとうございます。西田先生の「小さな水」について。大きい方が効率的では？という疑問もある中、なぜ小さな水なのか。

西田氏

私たちは「小さな水に全て寄せる」ことを言っているのではありません。大きな水と小さな水の共存がよい。町では大きな水、過疎地域では小さな水、あるいは双方を併用する、といった多様性が大事です。小さいものは手元感があり、扱いやすく実感が持てます。

ファシリテーター（瀧氏）

ただ、小さな水は脆弱では？失敗が許されないのでは？

西田氏

私自身いつもドキドキしています。ところで、スケールと強さの関係は相対的なところがあって、大きいシステムでも強大な力が働けば壊れます。自然は基本的には畏れるべきもので「なめない」姿勢が大切と考えています。小さくても大きくても、水の流れや土の動きを長期観察し、設置・運用すること。小さいものは、試みを重ね、失敗してもやり直せる利点もありますね。いずれにしても、経験の蓄積と伝承が重要です。

パネルディスカッション③

ファシリテーター（瀧氏）

ありがとうございます。パネリスト間で質問はありますか。

中村氏

斎藤さんに。南アルプス市の副読本では何を学んでいますか。

斎藤氏

学校教育課が作成したフルカラーの社会科副読本『わたしたちの南アルプス市』（社会科・3～4年、市HPにて公開中）で、人口・産業・水など地域の基礎が学べます。文化財課も改訂に協力し、最新情報を反映しています。昨年の改訂では、山梨県治水課主催の流域治水のシンポジウムに参加した際、私自身が流域治水を学び、これは行政、企業、個人全員など全員で行うもので、現代の治水・利水として早い段階で学べるよう、副読本に盛り込むべきだと考えました。学校の先生方と協議しながら、大槻先生にも監修していただきながら流域治水を副読本に盛り込みました。さまざまな方に教えてもらって連携したことを学校の先生方が授業で扱うことで、一般には馴染みの薄い用語も子どもたちが触れ、日常のものとして捉えられるようにしています。地域・子どもにつなげるのが私たちの役割です。

中村氏

私たちの地域（甲州市・山梨市・笛吹市）でも参考にし、広く学べるようにしたいです。

ファシリテーター（瀧氏）

副読本は共通の「知」をつくる土台として、河川管理者や企業にも有用だと思います。会場からの質問を1件。

会場質問

サントリーの天然水は南・北アルプスなど複数ありますが、南アルプスの特徴や味の違いは？

市田氏

水の味は主として地質の影響を受けます。阿蘇はやや硬度が高め。一方、南アルプスは花崗岩由来で、柔らかい飲み口。北アルプスも花崗岩ですが生成時期が古く、さらに硬度が低いなど、それぞれ個性があります。お好みで楽しんでいただければと思います。

ファシリテーター（瀧氏）

ありがとうございます。国交省は「流域総合水管理」**という言い方で、治水だけでなく利水・環境まで広げています。甲府盆地で育まれてきた治水・利水・恵みの仕組みは、まさにそれに当たります。そこに新たな企業の仲間が加わり、歴史に学び、つなぎながら未来を目指す像が見えてきました。

**令和6年8月30日に閣議決定された「水循環基本計画」において位置づけられた考え方であり、治水に加え、水利用・環境についても、流域のあらゆる関係者が協働し、「水災害による被害の最小化」「水の恵みの最大化」「水でつながる豊かな環境の最大化」の実現を図るもの。

残り時間も少ないので、最後に一言ずつ、気づき・エールなどをお願いします。西田先生から。

西田氏

エネルギーの話に触れられず失礼しました。医療・感染症の研究経験から「ケア」という言葉を、自然・人・社会に対しても使っていきたい。上から目線ではない、当事者としてのケア、日常としてのケアの実践を皆さんと進めたいです。

パネルディスカッション④

黛氏

全国を見た上で、南アルプスの歴史と守られてきた営みの厚みを実感しました。この地で事業で
きることが嬉しい。工場見学などの機会に歴史を伝え、コミュニケーションを深めていきたいで
す。

市田氏

「天然水の森」も一社では限界があります。周辺の皆さまと学び、連携することが重要。今年8月
には企業間連携を議論する「ネイチャーポジティブ・フォーラム」を開催しました。流域の皆さん
と対話を重ね、共に進めていきたいです。

中村氏

今日話し合われた多様な活動を「水」という共通のテーマで捉えることで、これまで個別に進め
られてきた各省庁の施策にも連関が見えてきます。水は自然環境・農業・防災・文化・観光など、
あらゆる分野を貫く基盤的な要素です。水をめぐる信仰や文化も深く、人と水の関係は切り離せま
せん。今後、地域を案内する際には、企業の取組事例や、水を起点としたまちの取り組みも紹介し
ながら、学びをさらに深めていきたいと思ひます。

斎藤氏

このシンポジウムはさまざま世代・分野の方々が参加して、学び合える、わくわくする場
でした。今日の話でもあった河川周辺の生物や植物の変遷や人との関係、深い地下水など、まだまだ
学ぶべきテーマは多くあると感じています。今後南アルプス市全体の水の循環を考える中で、今回
連携した企業の皆さんの知見を学校現場や地域へつないでいきたいと考えています。

ファシリテーター（瀧氏）

本当は行政への期待も議論したかったのですが、時間の都合で割愛します。今回、行政が地域と
企業を「つなぐ工事」を果たし、場を支えてくださっています。歴史と多様な知見、流域への愛を
持ち寄り、共通のビジョンを共有しながら、それぞれの立場で取り組みを進めていけると感じまし
た。これでパネルディスカッションを終わります。ありがとうございました。



総括①

■総括

実行委員長 田中 規夫（たなか のりお）

本日は「水シンポジウム2025 in やまなし」にお集まりいただき、熱心なご講演とご参加をありがとうございました。会場と展示を合わせておよそ300名の皆様にご来場いただきました。ここで、本日の講演を振り返りながら、全体の総括をさせていただきます。

まず、南アルプス市教育委員会の齋藤秀樹さんからは、「御勅使川における治水・利水の歩み—過去は未来の道しるべ—」と題してお話いただきました。地表水の少ない扇状地で、先人たちが築いた治水・利水の知恵と技術が、今の安全で水豊かな地域をつくり上げてきたこと、そしてその技術を継承するための教育活動が地域で活発に行われていることをご紹介いただきました。気候変動の時代においても、こうした地域固有の知恵を理解し、次の世代へ継承していくことの大切さを改めて感じました。

続いて、中村正樹さんからは「営みがつくった世界農業遺産一堰（せぎ）と果物と峡東の風景—」というご講演をいただきました。人が築いた「堰（せぎ）」という水路が果樹栽培を支え、地形に適応した農業が美しい景観と生物多様性を育んできたことを紹介されました。自然と人とのハイブリッドな営みを持続させることの重要性を教えてくださいました。

瀧健太郎さんからは「できることから始めよう—小さな流域治水のすすめ—」ということでご講演いただきました。流域治水をまちづくり・地域づくりとして捉え、誰もができる小さな取り組みを積み重ねることの意義を、豊富な実例とともに示してくださいました。小さな自然再生や体験学習が人材育成につながるというお話は特に印象的でした。

これまでの三つの講演はいずれも、「維持管理と試行錯誤が技術を育て、人を育て、地域を元気にする」という共通点を持っていたように思います。

続いて、サントリーの市田さんからは、「天然水の森」を通じた水源環境活動についてご講演いただきました。国内工場で汲み上げる地下水量の2倍以上を涵養するという目標のもと、森の再生やシカ食害対策など、長期的・科学的に支えられた活動が紹介されました。企業が地下水を活用しながら地域の水循環を支える姿勢は、利水の歴史と通じ、ネイチャーポジティブの理念にも重なります。

コーセーの田口陽子さんからは、グループ全体のサステナビリティ戦略と水への取り組み、そしてTNFD（自然関連財務情報開示）に基づく水リスク評価などの実践をお話いただきました。さらに黛博道さんからは、「豊かな水を求めて探し当てた山梨への思い」ということでご講演いただきました。化粧品製造に不可欠な水を求めてこの地にたどり着いた経緯と、山梨の自然環境への共感、そして大学・県と協働した持続的な水利用への期待が語られました。水を核に、企業・地域・大学が一体となって価値を創出する姿が印象に残りました。

最後に、西田継さんからは「寄せ水・寄せエネ、普段にも災害にも」についてご講演いただきました。大きな水（集中）と小さな水（分散）が共存する社会の重要性を指摘され、能登地震の経験をもとに、地域ごとに水の自立性を高める必要性を具体的に示されました。水源情報の共有や小型浄水器の活用など、地域レベルのレジリエンスを高める提案がありました。

パネルディスカッションでは、これまでの治水・利水の知恵を現代の技術やまちづくりにどう生かすかが議論されました。

歴史から地域の特性を学び、それを「記憶」として残すこと、過去の分散型技術が防災の視点からも再評価されること、そして基盤整備の技術と自然の要素をどう組み合わせしていくか、さらに企業理念やTNFDなどサステナビリティをめぐる最新動向も話題となりました。

総括②

サステナビリティという言葉は1980年代後半に登場しましたが、1992年の国連気候変動枠組条約、生物多様性条約を経て、今日では「カーボンニュートラル」と「ネイチャーポジティブ」が世界的な目標になっています。

本日の議論はまさにこの二つを“地域”という現場でつなぐ実践であり、その媒介となるのは、地域の特性と、そこに暮らす「人」だと感じました。

今後に向けては、気候変動の影響が強まる中、自然とともに生きる地域社会をつくるには、企業・行政・学術・市民の視点を結ぶことが欠かせません。今日の報告にあったように、市民参加や小さな実践が教育やコミュニティ形成に波及し、その中に企業活動の役割と責任も位置づけられます。行政・大学・市民・企業の連携によって、人材育成や地域文化の継承が進み、水だけでなく地域の魅力そのものが持続することを期待します。

特に今後は、大規模洪水への対策と、地域に根差した日常的な活動をどう結びつけていくか、試行錯誤を積み重ねる地域の実践と防災を担う行政の仕組みをどう橋渡ししていくかが重要です。今日の議論が「山梨モデル」として他地域に広がることを願っています。

最後に、本日のご講演者の皆様、質疑にご参加くださった皆様、ポスターや展示に出展いただいた皆様、そして支援・後援団体の皆様に心より感謝申し上げます。皆様の熱意と実践によって、「水とともに生きる山梨」の姿がより鮮明に描かれました。

これをもちまして、「水シンポジウム2025 in やまなし」の総括とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



次回開催県挨拶①

■ 次回開催県挨拶

徳島県 県土整備部 部長 代理として
河川政策課 副課長 澤本 憲司（さわもと けんじ）様

ただいまご紹介いただきました、徳島県県土整備部 河川政策課の澤本でございます。

本来であれば、県土整備部長がご挨拶申し上げるところでございますが、所用により出席が叶いませんでしたので、代わりに一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、ここ山梨県において、第29回水シンポジウムが多くの参加者のもと、成功裏に閉会を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。
また、本シンポジウムの開催にご尽力いただきました関係者の皆様に、深く敬意を表します。

来年のシンポジウムは、私ども徳島県でお引き受けいたします。今年の山梨県の大会のように素晴らしいものとなるよう、準備を進めてまいります。

ここで、徳島県の紹介をさせていただきます。

徳島県は、四国の東側に位置し、日本百名山の一つである「剣山」を含む四国山地や讃岐山脈など、山地が県土の面積の約8割を占めています。

「剣山」を中心とした山間部では、年平均降水量が3,000ミリを超え、特に那賀町の海川では日最大降水量が1,317ミリという日本記録を有するなど、全国有数の多雨地域です。

本県を代表する河川の一つとして、四国山地の北側を流れる吉野川があります。吉野川では、かつて、その洪水により運ばれてきた肥沃な土壌を利用した「藍作り」が盛んで、流域の人々に恩恵を与えてきました。

その反面、ひとたび大雨が降れば「暴れ川」となり、毎年のように住民を苦しめてきたことから、「日本三大・暴れ川」の一つに数えられ、「四国三郎」の異名を持つ「四国最大」の河川です。

その流域は四国4県にまたがり、基本高水流量は全国第1位の毎秒2万4,000立方メートルにのびります。吉野川の「流域面積」が、「全国1位」の利根川の2割程度ということからすると、いかに大きな洪水であるかがうかがえます。

吉野川には、洪水と闘ってきた先人たちの絶え間ない「治水の労苦の歴史」があります。それを現在に伝える多くの「洪水遺産」が流域内の各地に残されています。一例を紹介しますと「高地蔵」があります。「高地蔵」は度々洪水に見舞われていた「お地蔵様」を人々が申し訳なく思い、水没しないように台座を高くしたものとされており、その地区の洪水の大きさを示しています。私たちは、こうした過去の歴史を学ぶことにより、防災につながる多くの教訓を得ることができません。

次回開催地の徳島市は、吉野川とその支流が育てた三角州に発達した都市であり、大小あわせて138もの河川が流れ、国土交通省が認定する「水の郷・百選」に選ばれています。

市の中心部を流れる新町川は、「水都・とくしま」のシンボルともいえる河川ですが、昭和40年頃までは、工場や家庭からの排水で魚も住めない環境でした。その後、NPOを中心とした清掃活動など、官民一体となった様々な取組により、近年では寒中水泳ができるほど水質が改善されております。

次回開催県挨拶②

また、新町川とその支流により囲まれた中心市街地の区域は、その形から「ひょうたん島」の愛称で親しまれており、区域を一周する遊覧船が運航されるなど、今では徳島市を代表する「観光スポット」の一つとなっています。

徳島県では、「鳴門の渦潮」に代表される豊かな「自然」、「阿波藍」「阿波おどり」「阿波人形浄瑠璃」といった「伝統文化」や、更には「すだち」「なると金時」「鳴門鯛」「徳島ラーメン」など新鮮でおいしい「食」といった、徳島ならではの魅力を堪能いただけます。

ここで、徳島県の「観光PR動画」をご用意しましたのでご覧ください。

【動画上映】

来年はぜひ徳島県へお越しください。こころからお待ちしております。

結びになりますが、山梨県の益々のご発展と、本日ご参加の皆様のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、次回開催県を代表しての挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



シンポジウム同録動画youtube

●シンポジウム全編同録動画

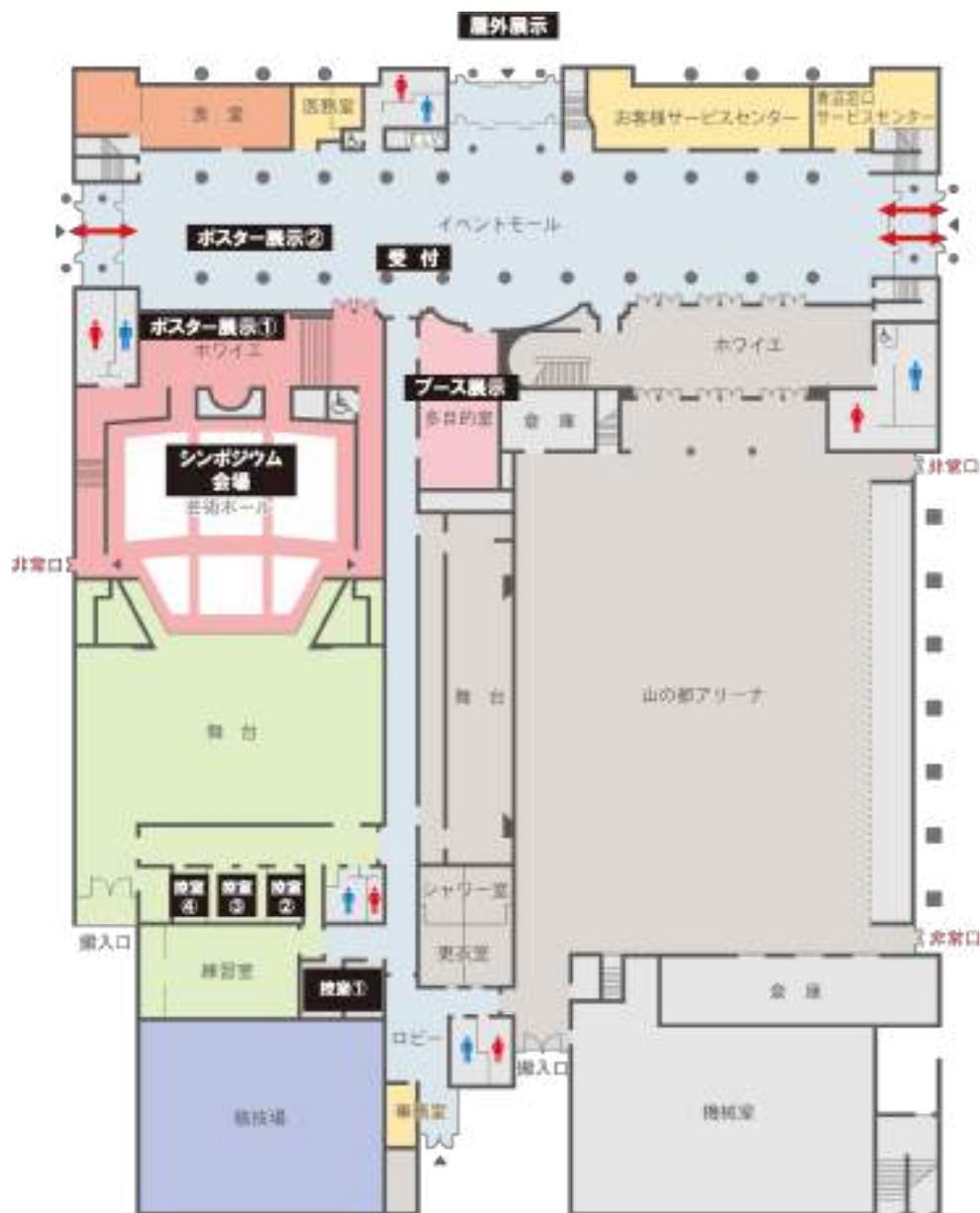
【Youtubeチャンネル「土木学会tv / JSCEtv」に動画公開】

<https://www.youtube.com/@JSCEtv/videos>



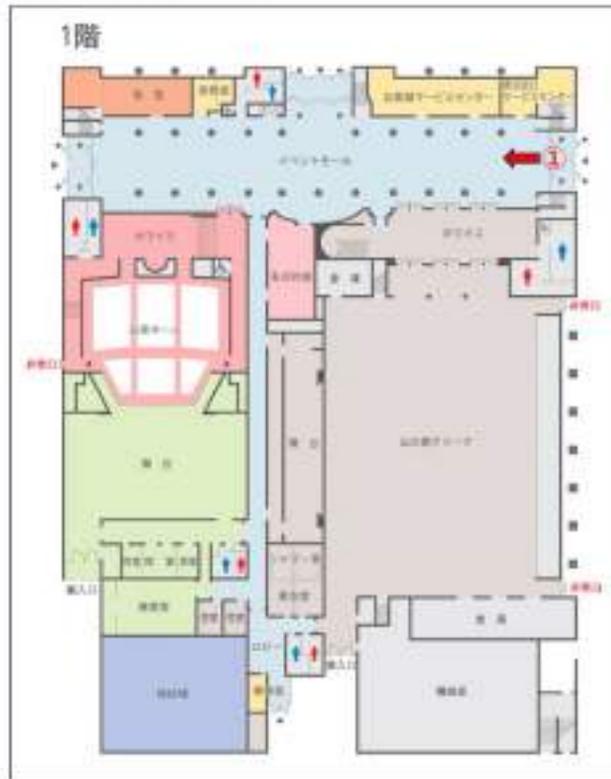
会場全体レイアウト

- 受付
- ポスター展示①
(南アルプス市関係)
- ポスター展示②
- ブース展示
- 屋外展示
- シンポジウム会場
- 控室
- ①講演者
- ②来賓
- ③出展関係・スタッフ
- ④出展関係・スタッフ

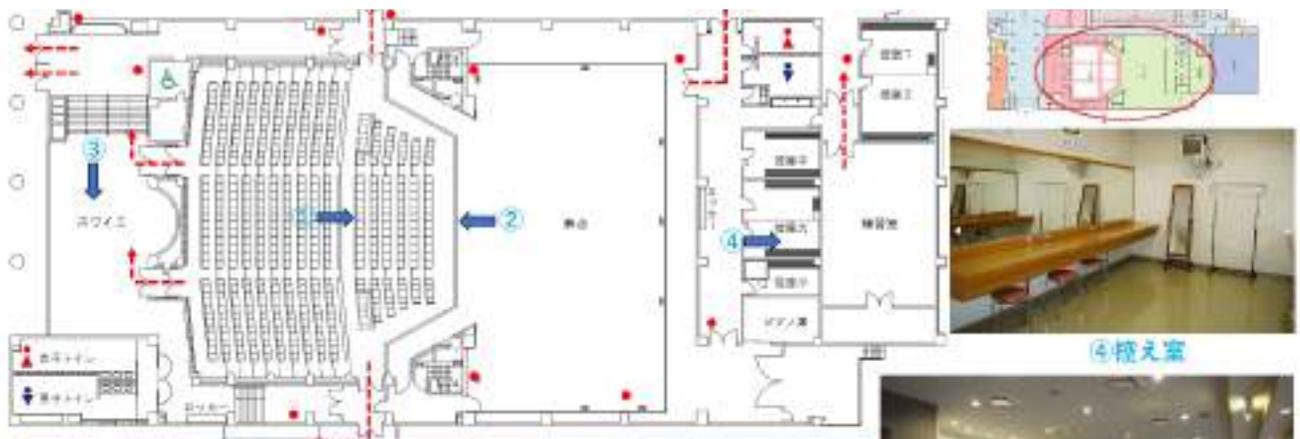


会場全体レイアウト

リッチダイヤモンド総合市民会館
RICH DIAMONDS General Civic Auditorium



① イベントモール



④ 控え室



① 舞台

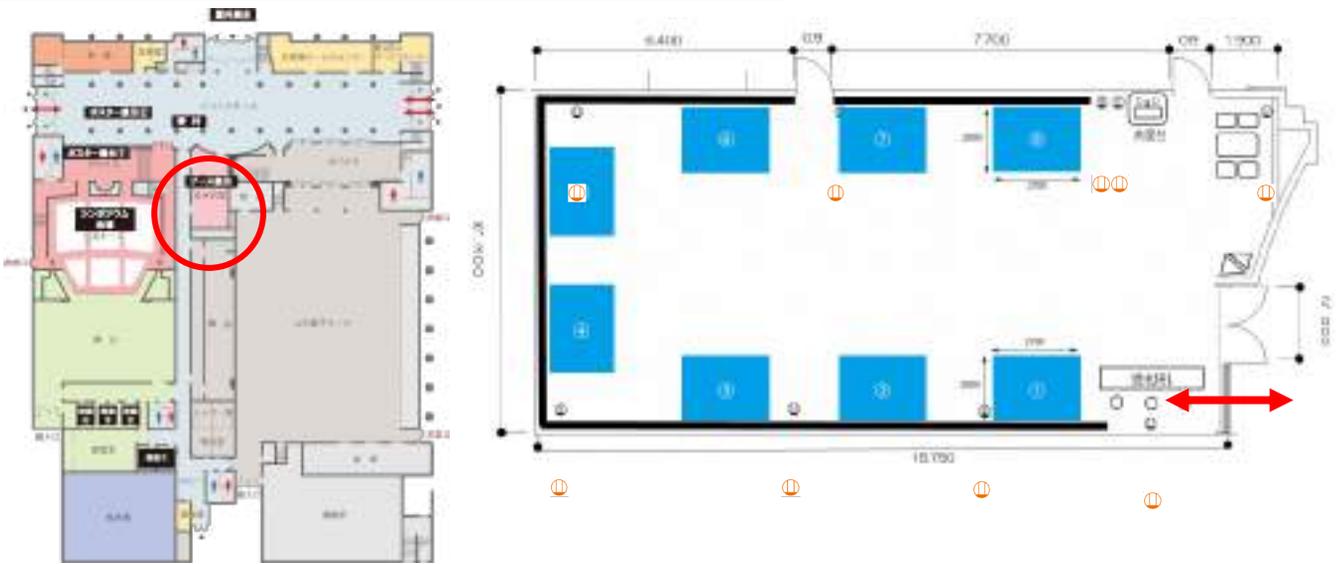


② 客席



③ ホワイエ

ブース展示レイアウト



① (一社) 小さな水



② (株) 高見澤



③ (株) ハヤテ・コンサルタント



④山梨大学 大槻研究室



ブース展示レイアウト

⑤INNFR A (株)



⑥山梨県地質調査事業協同組合



⑦⑧山梨県地中熱利用推進協議会



屋外展示 (株) ヤマゲン



シンポジウム会場近くにブース展示を設置。多くの来場者が足を停めて見学された。



ポスター展示レイアウト

■ポスター展示者一覧

【ポスター展示①】南アルプス市

【ポスター展示②】

- A.土木学会水工学委員会
- B.山梨大学工学部工学科土木環境工学コース(永井)
- C.山梨大学工学部工学科土木環境工学コース(八重樫)
- D.山梨大学国際流域環境研究センター(葛上)
- E.山梨大学国際流域環境研究センター(上條)
- F.山梨大学国際流域環境研究センター(根津)
- G.山梨大学地域防災・マネジメント研究センター(唐沢)
- H.山梨大学地域防災・マネジメント研究センター(正岡)
- I.国土交通省国土技術政策総合研究所
- J.関東地方整備局甲府河川国道事務所
- K.山梨県治水課
- L.城東リプロン(株)
- M.グリーンインフラ



行政、関係団体・企業の活動内容や事業紹介のポスターパネルを展示。

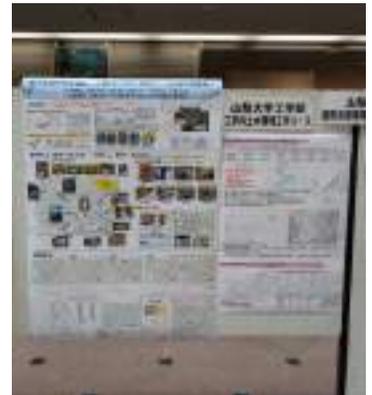
【ポスター展示①】南アルプス市



A.土木学会水工学委員会

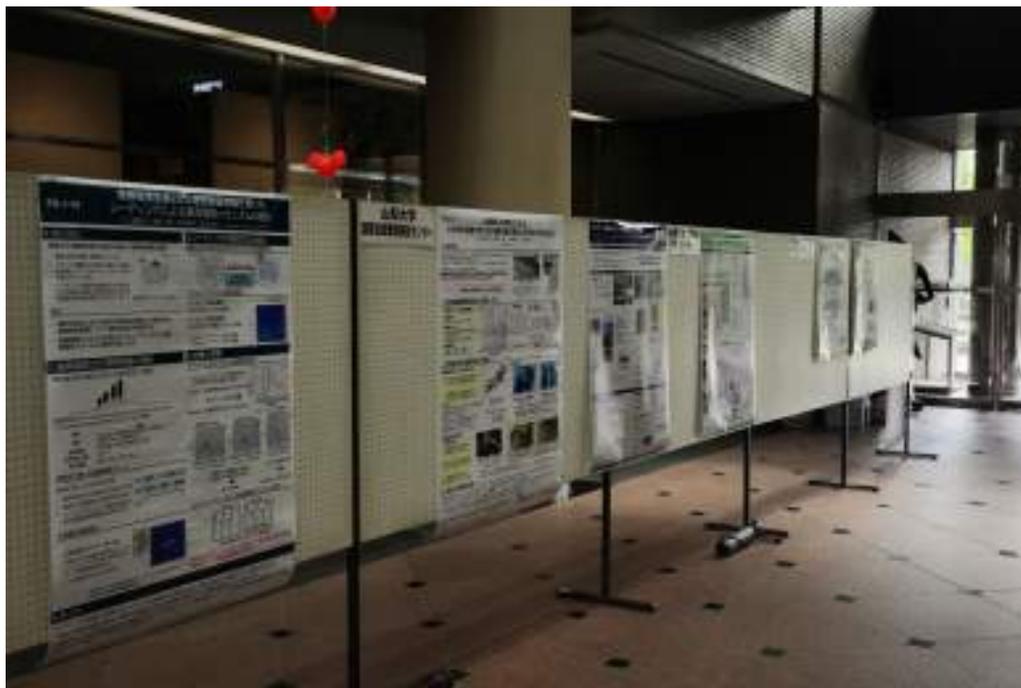


B.山梨大学工学部工学科土木環境工学コース(永井)
C.山梨大学工学部工学科土木環境工学コース(八重樫)

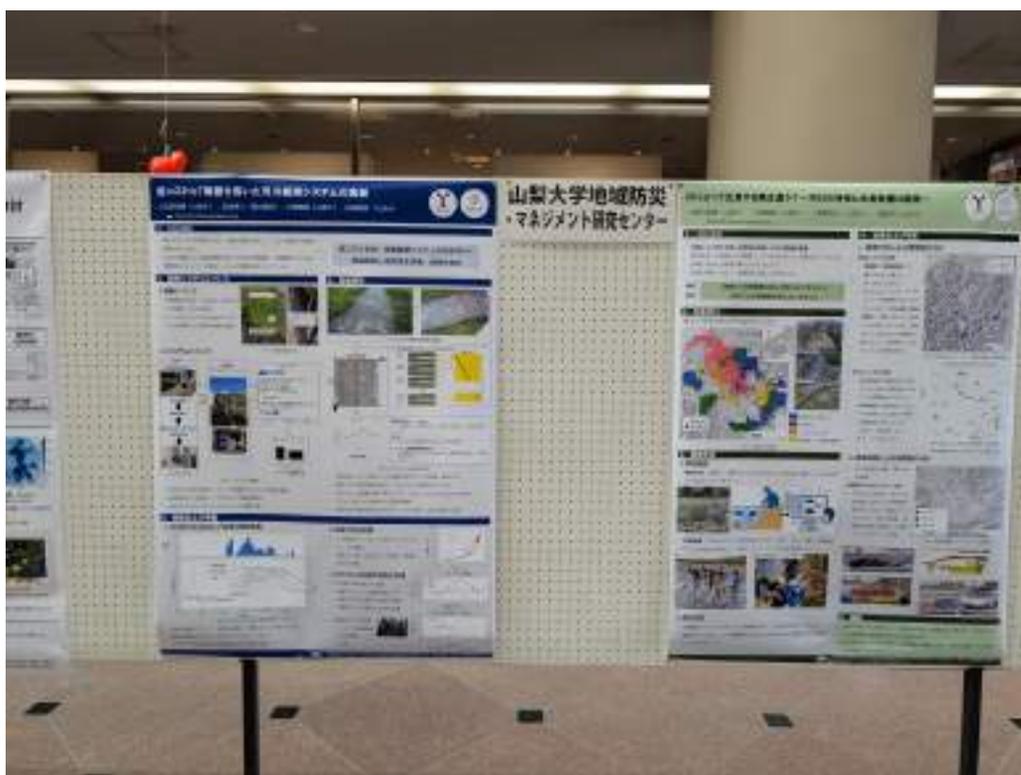


ポスター展示レイアウト

- D.山梨大学 国際流域環境研究センター(葛上)
- E.山梨大学 国際流域環境研究センター(上條)
- F.山梨大学 国際流域環境研究センター(根津)

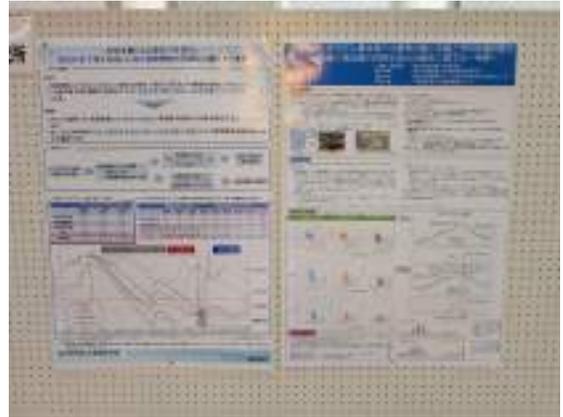


- G.山梨大学地域防災・マネジメント研究センター(唐沢)
- H.山梨大学地域防災・マネジメント研究センター(正岡)



ポスター展示レイアウト

I.国土交通省国土技術政策総合研究所



J.関東地方整備局甲府河川国道事務所



ポスター展示レイアウト

K.山梨県治水課



L.城東リブロン(株)



M.グリーンインフラ



会場風景 (シンポジウム)



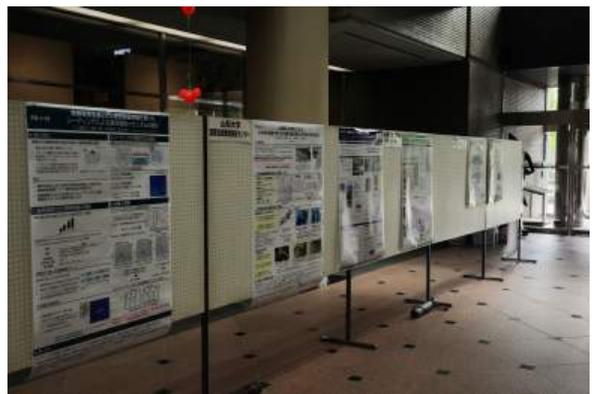
立て看板 (会場入口)



受付



受付



ポスター展示



ブース展示



ホール



屋外展示



ホワイエ

懇親会

- 日時：令和7年10月24日（金） 18:30～
- 会場：オープンカフェまるごとやまなし館
- 参加費：5,000円（税込み）
- 参加人数：39人

当日行われたシンポジウムの内容や、水に関する話題などについて意見交換を行い、有意義な場となった。



現地見学会 (10/25)

- 日時：2025年10月25日8:40出発～16:50解散
- 発着場所：山梨県庁西正面玄関
- 参加料金：昼食・保険料として2,000円(税込)
- 参加人数：39人

山梨県内の治水のための施設、歴史的な治水関連史跡などを実際に巡り、山梨県の災害の歴史やこれからの防災減災について、理解を深めた。

現地見学会 見学地マップ



現地見学会 (10/25)

①信玄堤公園 (山梨県甲斐市)



②南アルプス市ふるさと文化伝承館 (山梨県南アルプス市)



③柵形堤防／徳島堰 (山梨県南アルプス市)



現地見学会 (10/25)

④石積出三番堤 (山梨県南アルプス市)



⑤勝沼ぶどうの丘 (山梨県甲州市)



現地見学会 (10/25)

⑦日川水制群 (山梨県甲州市)



⑧シャトー・メルシャンワイン資料館 (山梨県甲州市)



⑨万力公園 (万力林) (山梨県山梨市)



広報宣伝

■チラシ作成・表面 (A4 5,200部 両面フルカラー)

水シンポジウム 2025 in やまなし

**山梨・暴れ川富士川の治水・利水・環境
古の知恵と現代の技術の融合
～過去は未来のみちしるべ～**

富士川流域における治水・利水の歴史と環境との調和に注目しながら、
気候変動や防災意識の低下といった課題に向き合う持続可能な水との付き合い方を考えます。

シンポジウム 入場無料
(観覧会も無料)

令和7年 10月24日(金)
12:30～17:30予定(開場11:30)

リッチダイヤモンド総合市民会館 (甲府市総合市民会館)

観覧会(事前申し込み) 時間 18:30～ 参加費 5,000円(税込)
会場 オープンカフェまるごとやまなし館

現地見学会 定員40名
(事前申し込み)

10月25日(土)
9:00出発～17:00解散予定

集 合 場 所 山梨県庁・西側正門(講事堂前)
見 学 先 南アルプス市/甲州市ほか
昼食・保険料 2,000円(税込)
※当日現金で集合 ※小中学生は保護者同伴

シンポジウム

<p>「野助使川における治水・利水の歩み ～過去は未来のみちしるべ～」 南アルプス市教育委員会文化財課 高橋 勇樹氏</p>	<p>「『サントリー天然水の森』を通じた 水源涵養活動」 サントリーホールディングス株式会社 サステナビリティ経営推進本部 [地域貢献]天然水の森グループ スペシャリスト 中田 智之氏</p>
<p>「宮みがつくった世界農業遺産 ～堰と黒物と峡東の風景～」 関東地域世界農業遺産推進協議会 アドバイザー 中村 正樹氏</p>	<p>「コーセーグループサステナビリティ戦略と 水の取り組み」 「豊かな水を求めて探し当てた山梨への想い」 株式会社コーセー 経営企画部 サステナビリティ戦略室 田口 穂子氏 執行役員 佐藤 啓典 室長 藤澤 氏</p>
<p>「できることからはじめよう 小さな流域治水のススメ」 滋賀県立大学 環境科学部 瀧 健太郎教授</p>	<p>「寄せ水・寄せエネ、管線にも災害にも」 山梨大学環境流域環境研究センター ・(一社)小さな水 西田 純教授</p>

パネルディスカッション 講演者がパネリストとなり、水に関する諸問題や様々な情報が展開されます。

【主催】第29回水シンポジウム2025 in やまなし 実行委員会 構成団体：(公社)土木学会水工学委員会、国土交通省関東地方整備局、山梨県、甲府市
このシンポジウムは、土木学会関東支隊山梨会、山梨大学地域防災・マネジメント研究センター、山梨大学環境流域環境研究センター
(公社)山梨県農産物振興センター、(一社)山梨県建設業協会、(一社)山梨県建設コンクリート協会、山梨県地質調査事業協会のみなさまと共催しています。
また、(公社)NCC財団、(一社)地質研究協会、(一社)関東地域づくり協会から協賛を受け、(一社)山梨県農業設計業協会から後援を受けています。

**河川
基金**

広報宣伝

■チラシ作成・裏面 (A4 5,200部 両面フルカラー)

現地見学会

見学地

- ・信玄堤公園
- ・南アルプス市ふるさと文化伝承館
- ・椋形堤防/徳島堰
- ・石積出三番堤
- ・勝沼ぶどうの丘
- ・日川水利群
- ・笛吹川・万力公園

講師

南アルプス市教育委員会 高藤 秀樹 氏
山梨県考古学協会 室伏 徹 氏

アクセスマップ

【公共交通機関等でのアクセス】

- ・甲府駅/「スター・ミナル」線(1)の駅より徒歩15分(山梨交通)
- または玉川小学校行き(平日運行)「甲府市総合庁舎」下車
- ・甲府駅/「スター・ミナル」線(2)の駅より徒歩15分(山梨交通)「山梨県庁」下車
- ・山梨県庁から徒歩15分

【自家用車でのアクセス】

- ・甲府自動車道 甲府南ICから山梨県道10号線(万力方面)へ約20分
- ・中央自動車道 甲府南ICから国道19号(東へ)約10分

土木学会CPDの認定を受けています。当日会場にて受講証明を発行します。
10月24日シンポジウム 3.2単位 10月25日現地見学会 2.9単位

参加お申し込み

ホームページはこちら

ホームページ上のお申し込みフォーム
または、申込書にご記入の上
FAX か郵送で事務局宛に
お申し込みください。

締切 シンポジウム 10月10日(金)
現地見学会・懇親会 9月19日(金)

※受付は先着順となります。定員に達し次第、締め切らせていただきます。

参加申込書 (書き間違いにご注意ください) **FAX:055-223-1704**

出席を希望される全てにチェックをお願いします <input type="checkbox"/> シンポジウム <input type="checkbox"/> 懇親会 <input type="checkbox"/> 現地見学会		
ふりがな	職業	年齢
氏名	<input type="checkbox"/> 建設業会社員 <input type="checkbox"/> その他会社員 <input type="checkbox"/> 公務員 <input type="checkbox"/> 学生 <input type="checkbox"/> その他()	<input type="checkbox"/> 10代以下 <input type="checkbox"/> 20代 <input type="checkbox"/> 30代 <input type="checkbox"/> 40代 <input type="checkbox"/> 50代 <input type="checkbox"/> 60代 <input type="checkbox"/> 70代以上
お住まいの市町村 <input type="checkbox"/> 県内 <input type="checkbox"/> 県外	電話番号	メールアドレス(任意) @
市・町・村		

お問い合わせ

「第29回水シンポジウム2025 in やまなし」実行委員会事務局
 山梨県県土整備部治水課 〒400-8501 山梨県甲府市丸の内1-6-1
 電話 055-223-1700 メール mizusympo2025@amsys.jp
 ホームページ <https://amsys.jp/mizusympo2025/>

流域治水

広報宣伝

■チラシ・ポスター配布先一覧

機関名	
土木学会	水工学委員会
山梨大学	
国土交通省	水管理・国土保全局
国土交通省 各地方整備局	現地機関含む
山梨県庁 関係部署	
山梨県 出先機関	建設事務所
山梨県内 市町村	
他都道府県	
山梨県内 商工会議所	
水害サミット参加自治体	R5～R7
シンポジウム講演者	
シンポジウム支援・後援団体	

広報宣伝（当日配布物）

■不織布バッグ



甲府市より
サイズ 中 約 215×215 mm



●水シンポジウム2025 in やまなし配布物（不織布バッグに内包）

- ・「水シンポジウム2025 in やまなし」当日配布パンフレット
- ・御勅使川における治水・利水の歩み ～過去は未来のみちしるべ～
南アルプス市教育委員会文化財課 より
- ・はじめての魚の居場所づくり vol.2
滋賀県立大学 環境科学部 瀧健太郎 教授より
- ・富士川 悠久の歴史、そして未来へ
国土交通省関東地方整備局 甲府河川国道事務所より
- ・みんなで取り組む！流域治水
山梨県県土整備部治水課 作成
- ・超研究エンタテイメントマガジンPEERLESS（ピアーレス）
- ・知（地）のソーシャルキャピタル 学びの山梨モデル
スペシャルコラム～太郎編～「開いていく学び」
(一社) 小さな水 より
- ・こんなところに地下水くん ～みんなで考えよう！これからの地下水活用～
山梨県地中熱利用推進協議会 より
- ・名水と愉しむ、山梨めぐり 推し水さがし
- ・甲武信ユネスコエコパーク 四大河の源流域
山梨県森林環境部自然共生推進課 より
- ・山梨観光ガイドマップ
(公社) やまなし観光推進機構 より
- ・甲府市観光ガイドブック
- ・甲府中心街まち歩き
- ・こうふジュエリーマップ
- ・旅色FOCAL
甲府市 より
- ・グリーンインフラ産業展2026 チラシ
- ・グリーンインフラ産業展2026 ポスター展示参加者募集チラシ

広報宣伝（新聞広告）

●山梨日日新聞広告

掲載日：2025年9月6日（土）
掲載面：一面突出
掲載サイズ：5.25cm×6.6cm
エリア：山梨県全域

掲載デザイン

水シンポジウム
2025 in やまなし

入場無料

令和7年 10月24日 金

12:30~17:30予定(開場11:30)

リッチダイヤモンド総合市民会館

「第29回水シンポジウム2025 in やまなし」
実行委員会事務局
メール mizusympo2025@amsys.jp

掲載紙面

山梨日日新聞
9月6日 土

対日関税大統領令に署名
米、自動車15%に下げ

介護事業所「人手不足」7割
高付増、全国1割を

静岡で突風 20人超けが

庭園管理士

報道実績

■山梨日日新聞デジタル さんちEYE

治水、利水を考える 甲府で「水シンポジウム」

2025年10月24日 14時48分

✕ ポスト

f シェアする

★ 記事スクラップ



治水や利水、水との持続可能な付き合い方を考える「水シンポジウム」が24日、甲府・リッチダイヤモンド総合市民会館で開かれた。

1996年から各都道府県で毎年開催されていて県内では初めて。土木学会水工学委員会、国土交通省関東地方整備局、県、甲府市で構成する実行委員会が主催し、「山梨・暴れ川 富士川の治水・利水・環境 古の知恵と現代の技術の融合」をテーマに講演やパネルディスカッションなどを行った。

講演では、南アルプス市教委文化財課の齋藤秀樹さんが御勅使川の治水や利水の歴史を紹介。「技術者や地域住民の過去の成功と失敗は今後の道しるべになる」と話した。峡東地域世界農業遺産推進協議会アドバイザーの中村正樹さんは、複数の川が形成した扇状地が広がる峡東地域で築かれた果樹栽培の歴史を紹介した。〈雨宮丈貴〉

■山梨日日新聞 2025年10月21日掲載

■山梨日日新聞 2025年10月25日掲載



広報宣伝 (WEB広告)

● Google ディスプレイ広告

性別問わず、幅広い年齢で使用されているGoogleに配信することでシンポジウムの認知向上・参加者募集を図る。
Google自社提供サービスのYouTube面、Discover面、Gmail面に広告。

- ・ 配信エリア：山梨県、長野県、静岡県、三多摩地区、埼玉県
- ・ 年齢：18歳～
- ・ 性別：すべて
- ・ 目的：WEBサイトへの誘導、シンポジウム参加申し込み

広告開始	広告終了	表示回数	クリック数	クリック率
2025.9.1	2025.10.10	128,473	935	0.73%

・ バナー広告



ホームページ①



**山梨・翠れ川富士川の治水・利水・環境
古の知恵と現代の技術の融合
～過去は未来のみちしるべ～**

富士山を背景に、翠れ川と富士川が流れる美しい風景が広がります。古くからの治水の知恵と、最新の治水技術が融合し、未来の水の未来を共に考えます。

シンポジウム

日時：10月24日(土)
10月24日(土) 10:00～17:00

会場：山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス

参加費：1,500円(税込) ※山梨県民は半額です。

現地見学会

日時：10月25日(日)
10月25日(日) 9:00～17:00

会場：山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス

参加費：1,500円(税込) ※山梨県民は半額です。

[PDF版チラシのダウンロード](#)

参加申込み

下記は「事前申込登録ボタン」よりお申し込みが可能です。
また、申込書（申込チラシとご契約のしおり）にご記入の上、FAXでお申し込みのうえお申し込みいただけます。

- シンポジウム：10月24日(土) 10:00～17:00 申込：入場料1,500円(税込) ※山梨県民は半額です。
- 見学会：10月25日(日) 9:00～17:00 申込：入場料1,500円(税込) ※山梨県民は半額です。
- 現地見学会：10月25日(日) 9:00～17:00 申込：入場料1,500円(税込) ※山梨県民は半額です。

[事前申込登録はこちら](#)

※受付は先着順となります。定員に達した際、締め切らせていただきます。

シンポジウム

開催会場

開催日：令和7年10月24日(土)
時 間：10:00～17:00予定（開場11:00）
会 場：山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
（山梨県立大学 山梨キャンパス）
住 所：山梨県山梨市西宮3-5-44



講演者

- 「最新治水における治水・利水の多岐 ～過去は未来のみちしるべ～」
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
山梨県立大学 山梨キャンパス
- 「治水がもたらした世界最高水準の治水技術と治水の未来～」
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
山梨県立大学 山梨キャンパス
- 「できることから始めよう治水の未来の治水～」
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
山梨県立大学 山梨キャンパス
- 「サントリー-茨城県水産庁」をテーマにした治水講演会
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
山梨県立大学 山梨キャンパス
- 「治水がもたらした世界最高水準の治水技術と治水の未来～」
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
山梨県立大学 山梨キャンパス
- 「治水がもたらした世界最高水準の治水技術と治水の未来～」
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
山梨県立大学 山梨キャンパス

講演者プロフィール

講演者がバリエーションとなり、お申し込みのうえお申し込みいただけます。
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス

講演者プロフィール

山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス

ブース出展

- 一般社団法人 小中水**
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
- 株式会社山梨県立大学**
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
- 株式会社山梨県立大学**
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス
- 山梨県立大学 山梨キャンパス**
山梨県立大学 山梨キャンパス 山梨キャンパス 山梨キャンパス

看板関係①

■メインタイトル看板 (7200*900)



■会場入口看板 (1800*900)



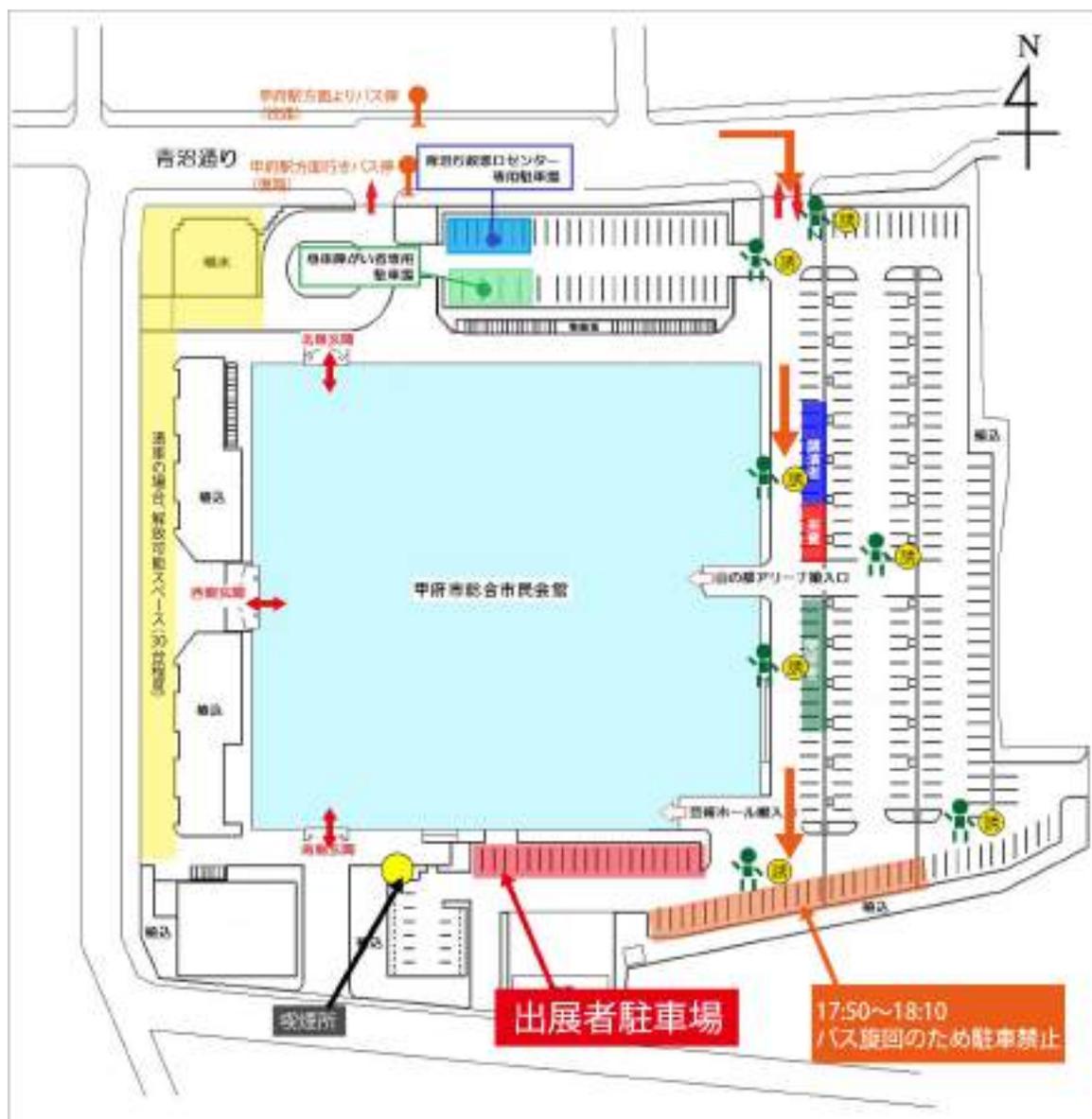
■ブース出展看板 (200*900)

200	900	一般社団法人 小さな水	株式会社高見澤 インフラセグメント
		山梨大学 大槻研究室	INNFRRA 株式会社
		山梨県地中熱利用推進協議会	株式会社ヤマゲン
		株式会社ハヤテ・コンサルタント	山梨県地質調査事業協同組合

■ポスター展示看板 (A3横半分ラミネート)

南アルプス市 教育委員会	土木学会 水工学委員会	山梨大学工学部 工学科土木環境工学コース	山梨大学工学部 工学科土木環境工学コース	山梨大学 国際流域環境研究センター
山梨大学 国際流域環境研究センター	山梨大学 国際流域環境研究センター	山梨大学地域防災 ・マネジメント研究センター	山梨大学地域防災 ・マネジメント研究センター	国土交通省 国土技術政策総合研究所
関東地方整備局 甲府河川国道事務所	山梨県治水課	城東リブロン(株)		

駐車場



■駐車可能台数 (合計300台)

- ・来賓 3台 ・講演者 5台
- ・出展者 19台 ・実行委員会 3台
- ・スタッフ 7台 ※いずれも予定台数

■バス巡回

17:50～18:10 臨時バス巡回。

オレンジ色の矢印のように進入し、巡回したのち逆順でバス停へ向かう。

このスペースは、あらかじめ駐車禁止とする。

■車両証



バス関係①

【往路】

■ 5番のりば

富士見経由 奈良原行き (山梨交通)

または

富士急上阿原車庫行き (富士急行)

※甲府市総合市民会館で下車

片道240円 (大人)

交通系ICカード利用可



【復路】

■ 甲府駅方面行きバス停



■ 時刻表 (抜粋)

甲府駅～甲府市総合市民会館

甲府駅発	総合市民会館着	運行会社	行先	バス乗り場
11:35	11:46	山交	(臨時)甲府市総合市民会館	5
12:00	12:09	富士急	富士急上阿原車庫	5
12:03	12:14	山交	83 (富士見) 奈良原	5
13:40	13:51	富士急	富士急上阿原車庫	5

甲府市総合市民会館～甲府市

総合市民会館発	甲府駅着	運行会社	行先
16:24	16:35	山交	83 (甲府駅) 長塚
17:40	17:51	山交	(臨時) 甲府駅
18:10	18:21	山交	(臨時) 甲府駅
18:49	19:00	山交	83 (甲府駅) 長塚

バス関係②

■甲府駅⇒総合市民会館

(城東・青沼方面)

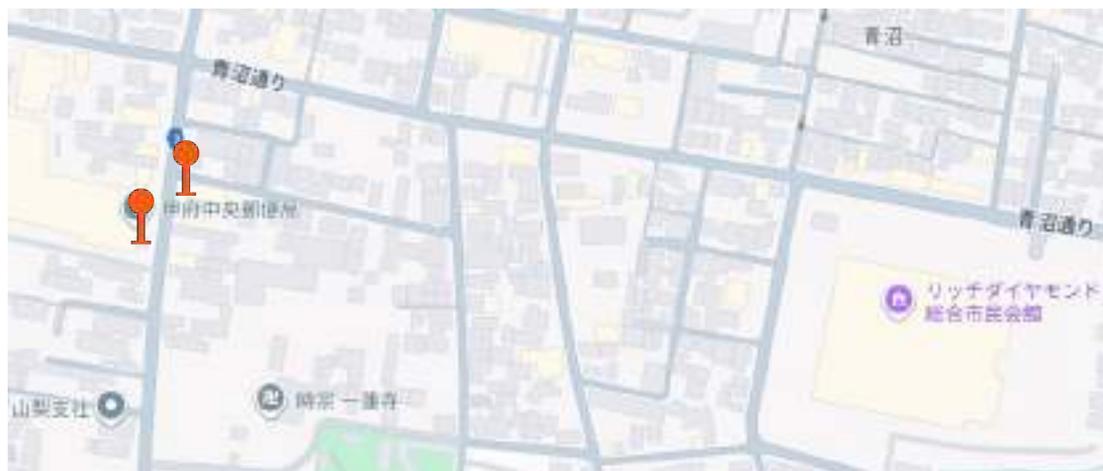
系統番号・行き先			通過時刻	
83	(富士見)	奈良原	○	6:39
83	(富士見)	奈良原		7:14
FJ		富士急上阿原車庫		9:10
83	(富士見)	奈良原	○	9:23
FJ		富士急上阿原車庫		12:00
83	(富士見)	奈良原		12:03
FJ		富士急上阿原車庫		13:40
83	(富士見)	奈良原	○	15:03
83	(富士見)	奈良原		17:23
FJ		富士急上阿原車庫		18:35
83	(富士見)	奈良原	○	18:48
FJ		富士急上阿原車庫		19:40

■総合市民会館⇒甲府駅

(甲府駅方面)

系統番号・行き先			通過時刻	
83		長塚	○	7:54
83		長塚		8:49
83		長塚	○	11:09
83		長塚		13:34
83		長塚	○	16:24
83		長塚		18:49
83		長塚	○	20:10

■太田町見付バス停



バス関係③

おおたまちみつ
太田町見付通過時刻表
Otamachi-mitsuke

○印 土曜・休日運休
商印 商工会議所経由便

×印 土曜・休日及び8/13～8/15運休

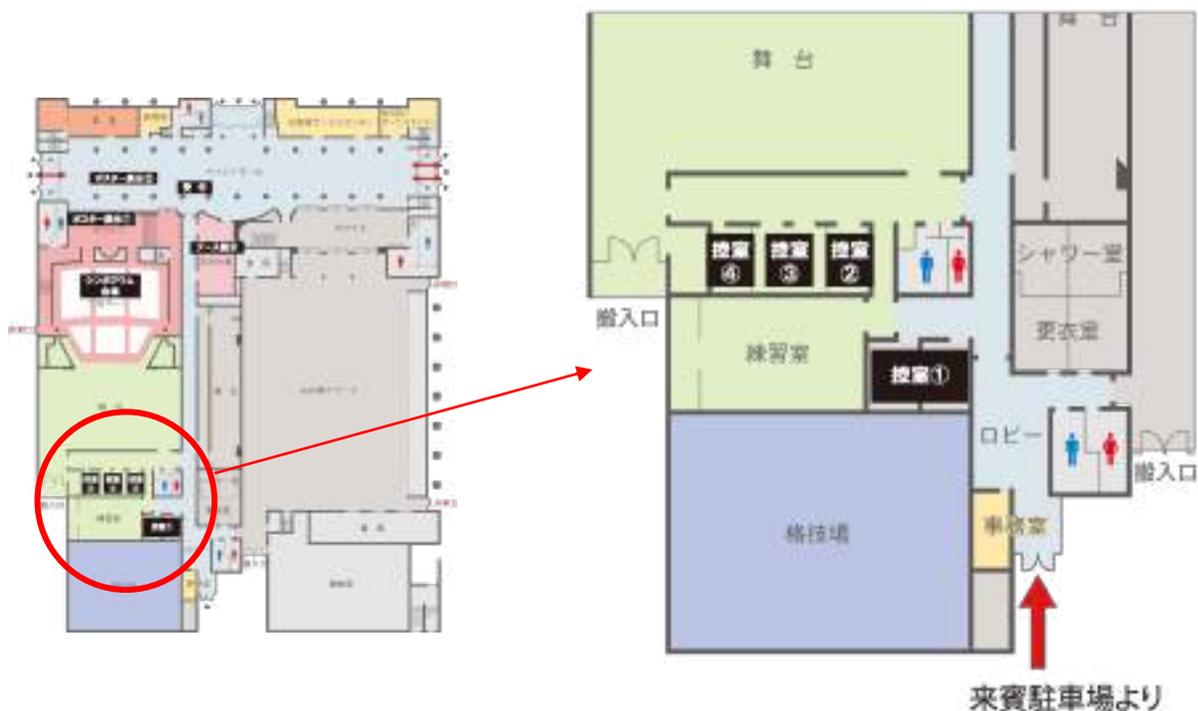
甲府駅南口方面

系統番号・行き先	通過時刻
02 (一高・千原) 山宮循環	6:27
02 (一高・千原) 山宮循環	× 6:49
02 (一高・千原) 山宮循環	7:00
02 (一高・千原) 山宮循環	× 7:20
02 (一高・千原) 山宮循環	7:40
75 中央病院	○商 7:55
02 (一高・千原) 山宮循環	8:30
76 (長塚) 勸業営業所	商 8:30
01 (一高・羽黒) 山宮循環	× 8:55
70 (飯田) 勸業団地	9:23
02 (一高・千原) 山宮循環	9:50
75 中央病院	商 9:55
01 (一高・羽黒) 山宮循環	10:55
76 (長塚) 勸業営業所	商 11:00
78 (中央病院) 双葉ニュータウン	×商 11:05
70 (飯田) 勸業団地	11:23
02 (一高・千原) 山宮循環	× 11:30
26 (中央病院・羽黒) 山宮循環	11:50
76 (長塚) 勸業営業所	×商 11:55
02 (一高・千原) 山宮循環	12:20
70 (飯田) 勸業団地	× 13:23
02 (一高・千原) 山宮循環	13:28
76 (長塚) 勸業営業所	商 14:25
01 (一高・羽黒) 山宮循環	14:40
02 (一高・千原) 山宮循環	× 15:10
01 (一高・羽黒) 山宮循環	15:40
78 (中央病院) 双葉ニュータウン	×商 16:00
70 (飯田) 勸業団地	× 16:23
26 (中央病院・羽黒) 山宮循環	16:35
76 (長塚) 勸業営業所	商 16:50
01 (一高・羽黒) 山宮循環	17:10
01 (一高・羽黒) 山宮循環	× 17:40
75 中央病院	商 17:45
70 (飯田) 勸業団地	18:09
01 (一高・羽黒) 山宮循環	18:20
76 (長塚) 勸業営業所	商 18:30
01 (一高・羽黒) 山宮循環	19:05
70 (飯田) 勸業団地	× 19:44
01 (一高・羽黒) 山宮循環	20:08

甲府駅北口方面

系統番号・行き先	通過時刻
10 武田神社	× 6:42
15 上善群	6:42
16 塚原	6:46
10 武田神社	× 7:01
16 塚原	7:12
12 積翠寺	7:20
16 塚原	× 7:32
16 塚原	× 7:37
10 武田神社	8:00
14 HANAZONO本社バス	8:27
10 武田神社	9:26
10 武田神社	9:50
16 塚原	10:22
12 積翠寺	11:20
16 塚原	× 11:47
15 上善群	12:37
10 武田神社	12:50
16 塚原	13:02
10 武田神社	13:20
16 塚原	14:47
10 武田神社	14:50
14 HANAZONO本社バス	× 15:02
10 武田神社	15:20
16 塚原	15:57
15 上善群	× 16:47
10 武田神社	16:50
10 武田神社	17:06
16 塚原	× 17:24
16 塚原	17:42
10 武田神社	17:50
12 積翠寺	18:20
14 HANAZONO本社バス	18:32
16 塚原	18:55
10 武田神社	19:00
16 塚原	× 20:11
10 武田神社	× 20:31

来賓・登壇者控室



	使用者	所属・肩書	到着予定	随行	駐車台数
控室① 【講演者】	斎藤 秀樹	南アルプス市教育委員会			
	中村 正樹	峡東地域世界農業遺産推進協議会			
	瀧 健太郎	滋賀県立大学			
	市田 智之	サントリホールディングス(株)			
	田口 陽子	(株)コーセー			
	黛 博道	(株)コーセー 執行役員			
	西田 継	山梨大学			
控室② 【来賓】	橋本雅道	国交省関東地方整備局長			
	井上弘之	山梨県副知事			
	樋口雄一	甲府市長			
控室③ 控室④ 【出展関係】 【スタッフ】	出展関係者・スタッフの昼食休憩場所、荷物置き場				

来場者アンケート

来場者アンケート

○方法 : Microsoft Forms のアンケート機能による入力

○依頼方法 : 来場時に配布した資料の中に二次元コードを記載したチラシを同封



○アンケート項目

1. お住まいの都道府県 *

答えの選択

2. 年齢 *

答えの選択

3. 職業・所属 *

答えの選択

来場者アンケート

講演・話題提供について5段階で評価をお願いします

4. 講演1 通勤便川における治水・利水の歩み～過去は未来のみちしるべ～ 斎藤秀樹氏*
(不満) 1 2 3 4 5 (満足)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 講演2 賞みが見つかった世界農業遺産～種と果物と映える風景～ 中村正樹氏*
(不満) 1 2 3 4 5 (満足)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. 講演3 できることからはじめよう 小さな流域治水のススメ 斎藤太郎氏*
(不満) 1 2 3 4 5 (満足)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

7. 話題提供1 『サントリー天然水の森』を通じた水源涵養活動 市田智之氏*
(不満) 1 2 3 4 5 (満足)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

8. 話題提供2 コーゼグループ サステナビリティ戦略と木の取り組み 田口陽子氏*
(不満) 1 2 3 4 5 (満足)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

9. 話題提供2 豊かな水を求めて探し当てた山梨への想い 齋藤道氏*
(不満) 1 2 3 4 5 (満足)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

10. 話題提供3 寄せ水・寄せ工水、普段にも災害にも 西田純氏*
(不満) 1 2 3 4 5 (満足)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

11. 講演・話題提供について感想を自由に記述してください

回答を入力してください

来場者アンケート

パネルディスカッションについて

12. パネルディスカッション全般について評価をお願いします *

(不表) 1 2 3 4 5 (満足)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

13. パネルディスカッションの時間はどうでしたか? (40分) *

(悪い) 1 2 3 4 5 (悪い)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

14. パネルディスカッションについて感想を自由に記述してください

回答を入力してください

ブース出展について

15. 興味をもったブースをお答えください(複数回答可) *

- 一般社団法人 小さな水
- (株)高見澤インフラセグメント
- (株)ハヤマコンサルタント
- 山梨大学 大槻研究室
- INNFR(株)
- 山梨県地中熱利用促進協議会
- 山梨県地質調査事業協同組合
- (株)ヤマケン
- 特になし

来場者アンケート

第29回水シンポジウム2025inやまなし全般について

16. 本シンポジウムに対する満足度をお聞かせください *

(不満) 1 2 3 4 5 (満足)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

17. シンポジウムに参加されて、災害について知り防災意識は高められましたか？ *

(高まらなかった) 1 2 3 4 5 (高まった)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

18. 流域に住む全員で取り組む流域治水について関心は高まりましたか？ *

(高まらなかった) 1 2 3 4 5 (高まった)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

19. 今回のシンポジウムをどこで知りましたか？(複数回答可) *

第29回水ホームページinやまなしのホームページ

ポスターちらし

SNS・WEB公啓

知人等の紹介

新聞・広報紙

その他

20. 来場した目的はなんですか？(複数回答可) *

出水に興味があったから

治水に興味があったから

講演、懇話会に興味があったから

ブース出展に興味があったから

家族・友人・知人に誘われたから

来場者アンケート

21. 来年も「水シンポジウム」に参加したいですか？*

来年度開催は地色祭です

会場にて参加したい

オンラインで参加したい

参加する予定はない

22. 今回のシンポジウムについてご意見・ご感想をお聞かせください

回答を入力してください

23. 今後のシンポジウムで取り上げて欲しいテーマ、講師等、ご希望がありましたら教えてください

回答を入力してください

来場者アンケート

○回答件数 15件

1. お住まいの都道府県

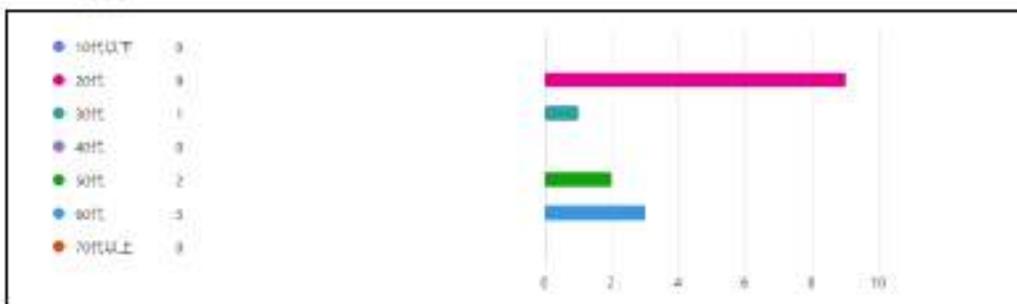
山梨県：10件

埼玉県：1件

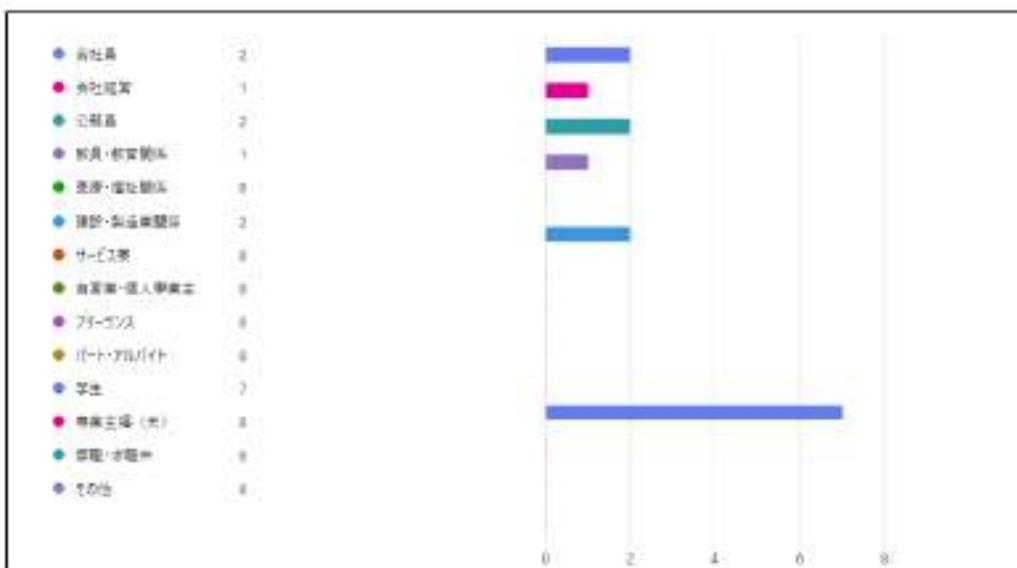
東京都：2件

徳島県：2件

2. 年齢



3. 職業・所属

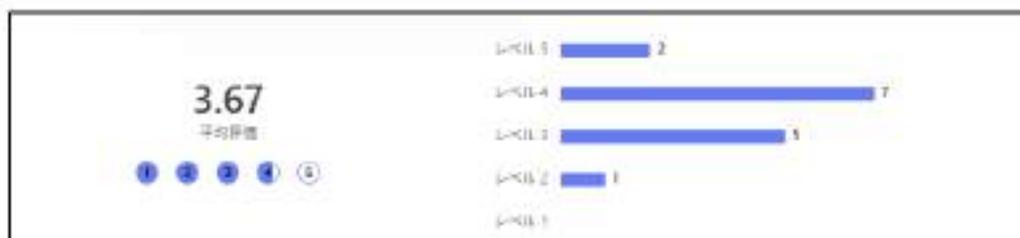


4. 講演1 御馳用における治水・利水の歩み～過去は未来のみちしるべ～ 斎藤秀樹氏

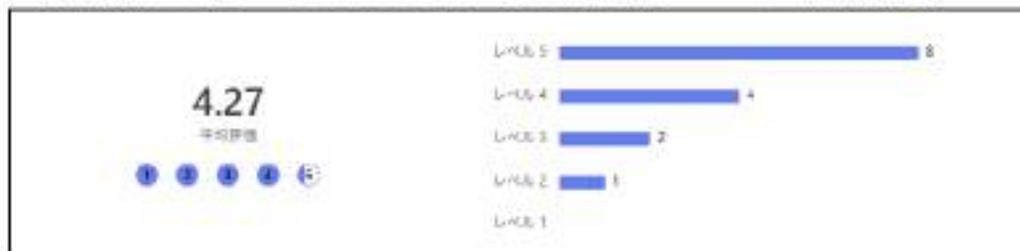


来場者アンケート

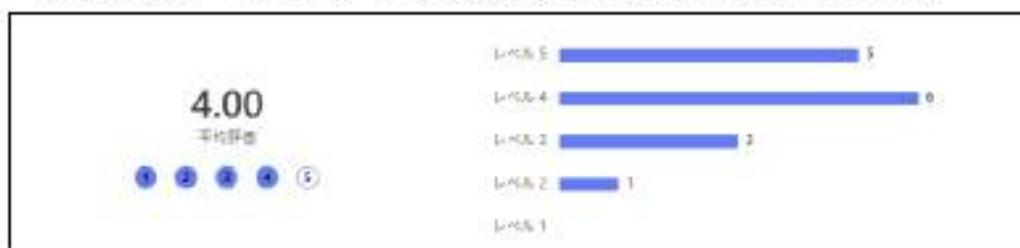
5. 講演2 営みがつくった世界農業遺産～穀と果物と関東の風景～ 中村正樹氏



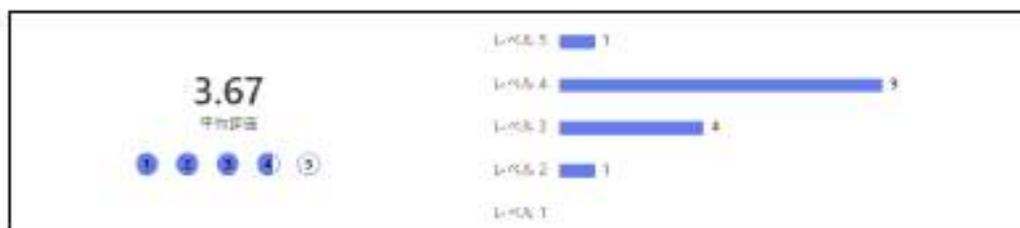
6. 講演3 できることから始めよう 小さな流域治水のススメ 滝健太郎氏



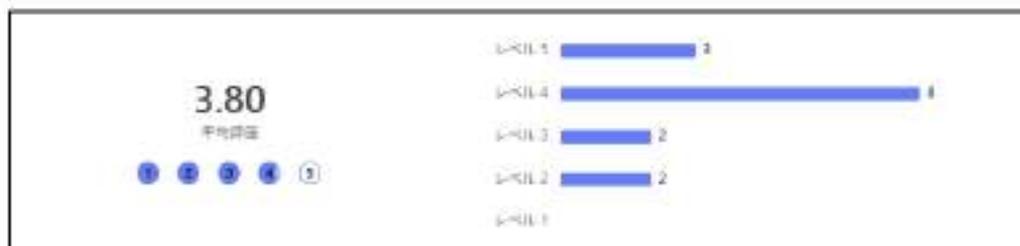
7. 話題提供1 『サントリー天然水の森』を通じた水源涵養活動 市田智之氏



8. 話題提供2 コーセーグループ サステナビリティ戦略と水の取り組み 田口陽子氏



9. 話題提供2 豊かな水を求めて探し当てた山梨への想い 嵐博道氏



来場者アンケート

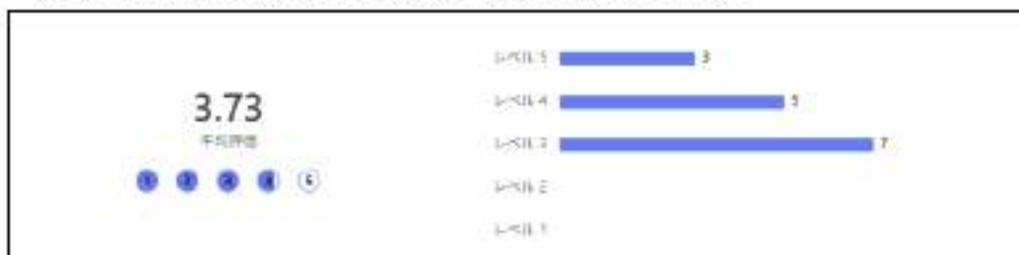
1.0. 話題提供3 寄せ水・寄せエネ、普段にも災害にも 西田穂氏



1.1. 講演・話題提供について感想を自由に記述してください

- ・楽しく鑑賞出来たが、各講演者が時間を守っていたにもかかわらず、時間通りでない人がいたため、不公平を感じた。
- ・もう少し画面が大きいと良かった
- ・いずれの講演もとても勉強になりました。
- ・講演者の選択が大変良かった。水を幅広く感じる事が出来たのではないかな。
- ・民間のサステナ活動について理解できたとともに、野生生物の対策、苦勞もわかった。また、表流水の利水と違い、地下水の水利用の難しさも感じた。

1.2. パネルディスカッション全般について評価をお願いします



1.3. パネルディスカッションの時間はどうでしたか？(40分)

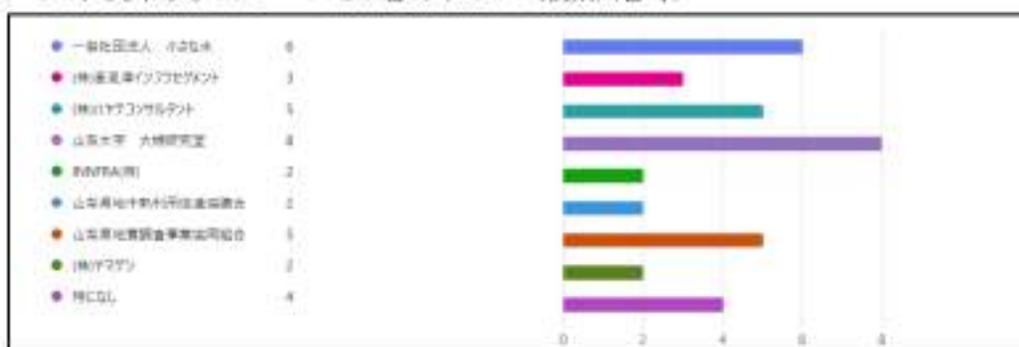


来場者アンケート

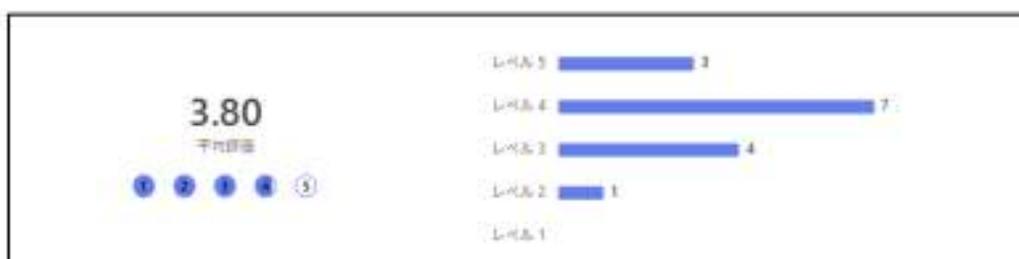
14. パネルディスカッションについて感想を自由に記述してください

- ・知識量が少なく、わからないことが多かった。
- ・色々な視点から話が展開していった面白かった
- ・行政やインフラ企業だけでなく多様なビジネス視点があり面白かった。
- ・登壇者の幅が広いのでコメンテーターは難しかったと思う。そのなかで良くまとめられたと思う。欲を言えばもう少しテーマを絞り込んで議論しても良かったのではないか。
- ・各パネリストの立場により、ディスカッションの内容がさまざまな取り組みがあることがわかった。
- ・専門分野が異なるみなさんでのディスカッションでしたが、とても面白かったです。

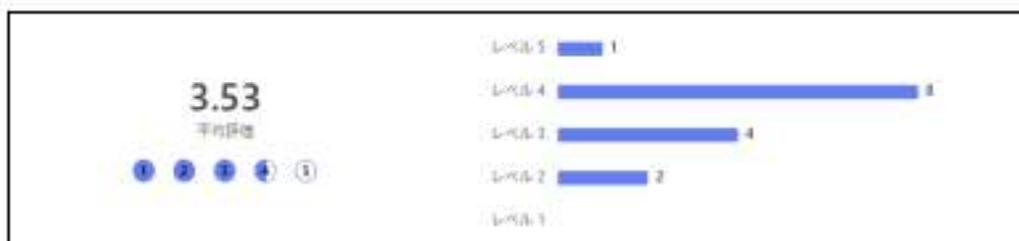
15. 興味をもったブースをお答えください(複数回答可)



16. 本シンポジウムに対する満足度をお聞かせください



17. シンポジウムに参加されて、災害について知り防災意識は高められましたか？

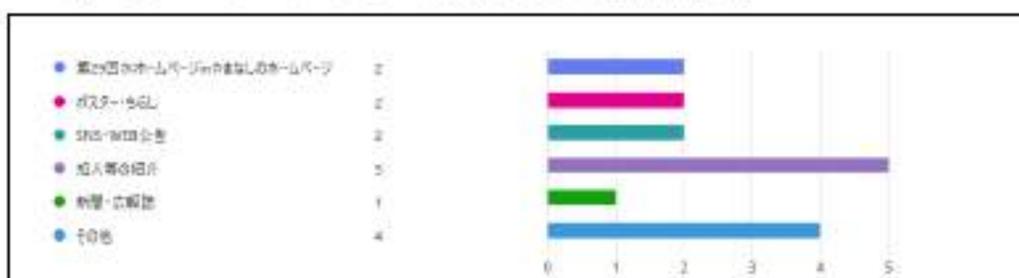


来場者アンケート

18. 流域に住む全員で取り組む流域治水について関心は高まりましたか？



19. 今回のシンポジウムをどこで知りましたか？(複数回答可)



20. 来場した目的はなんですか？(複数回答可)



21. 来年も「水シンポジウム」に参加したいですか？



来場者アンケート

22. 今回のシンポジウムについてご意見・ご感想をお聞かせください

- ・瀧先生の話がとても引き込まれた
- ・とてもしっかりした企画で東京からわざわざ来た甲斐がありました。今後の研究や施策に活かすヒントを沢山頂きました。国交省には環境省や農水省や文部科学省をリードして欲しい。
- ・良い企画だった。参加者が少ないのがもったいないと感じた。唯、繰り返してこのような取り組みが繋がればと願います。
- ・事前にタイムテーブルを公表していただきたいです。

23. 今後のシンポジウムで取り上げて欲しいテーマ、講師等、ご希望がありましたら教えてください

- ・農業用水関係者もいれたらと思う。

参考資料

「第29回 水シンポジウム 2025 in やまなし」 実行委員会規約

(名称)

第1条 本会は、「第29回水シンポジウム 2025 in やまなし」実行委員会（以下、「実行委員会」という。）と称する。

(目的)

第2条 実行委員会は、「第29回水シンポジウム 2025 in やまなし」（以下、「水シンポジウム」という。）の円滑かつ効果的な開催を図ることを目的とする。

(実行委員会)

第3条 実行委員会は、水シンポジウムの開催及び運営に関する企画事項の決定を行うものとし、実行委員は別表1に掲げる者若しくは職にある者をもって充てる。

2 実行委員長は、土木学会水工学委員会委員長の職にある者をもって充てる。

3 実行委員長は、会務を総括し、実行委員会を代表する。

4 実行委員会には、顧問を置くことができる。

5 顧問は、実行委員会の活動に際し、指導と助言を行うものとする。

6 実行委員会の会議は、実行委員長が招集するものとし、会議の議長は実行委員長が務める。ただし、実行委員長に事故等のあるときは、あらかじめ実行委員長が指名する実行委員がその職務を代行する。

7 実行委員長が必要と認めるときには、実行委員長の指名した者を実行委員に追加・変更することができる。

(事務局)

第4条 実行委員会の事務を処理するため、事務局を置く。

2 事務局員は別表2に掲げる者若しくは職にある者をもって充てる。

3 事務局長は、山梨県県土整備部治水課長の職にある者をもって充てる。

4 事務局長が必要であると認めるときには、事務局長が追加・変更した者を事務局が行う会議に参加させることができる。

5 事務局は、山梨県県土整備部治水課に置く。

(経費)

第5条 実行委員会の経費は、分担金その他の収入をもって充てる。

2 経費の精算は、事業終了後に行う。

(監事)

第6条 監事は、実行委員会の会計を監査するものとし、関東地方整備局甲府河川国道事務所長の職にある者をもって充てる。

(任期)

第7条 実行委員、顧問、監事の任期は、この実行委員会が解散するまでとする。

(その他)

第8条 この規約に定めるもののほか、水シンポジウムの開催に関し必要な事項は、実行委員会に諮り、実行委員会の委員長がこれを定める。

附 則 この規約は、令和6年10月16日から施行する。

この規約は、令和7年6月10日に改定する。

参考資料

「第29回水シンポジウム2025 in やまなし」実行委員及び事務局員名簿

2025/10/24時点

別表-1 実行委員会 (◎実行委員長)

機関名	役職名	氏名	備考
◎ 土木学会水工学委員会	委員長	田中 規夫	埼玉大学
土木学会水工学委員会	幹事長	戸田 祐嗣	名古屋大学
土木学会水工学委員会	水文部会長	市川 温	京都大学
土木学会水工学委員会		大槻 順朗	山梨大学
関東地方整備局河川部	河川部長	室永 武司	
関東地方整備局甲府河川国道事務所	事務所長	草野 真史	
山梨県県土整備部	部長	寺沢 直樹	
甲府市まもづくり部	部長	大森 重竹	

別表-2 事務局 (●事務局長)

機関名	役職名	氏名	備考
土木学会水工学委員会	幹事長	戸田 祐嗣	名古屋大学
山梨大学生命環境学部	教授	石平 博	
山梨大学工学部	准教授	大槻 順朗	
山梨大学工学部	准教授	相馬 一義	
山梨大学工学部	准教授	八重樫 映子	
山梨大学工学部	准教授	馬籠 純	
山梨大学工学部	助教	松浦 拓哉	
国土交通省関東地方整備局河川計画課	河川計画課長	奥田 直斗	
国土交通省関東地方整備局甲府河川国道事務所	副所長	内藤 ゆう子	
● 山梨県県土整備部治水課	治水課長	山川 秀人	
甲府市まもづくり部道路河川課	課長	齊藤 芳彦	

参考資料

別表-参考 窓口 (☆主の窓口)

機関名	役職名	氏名
山梨大学生命環境学部	教授	石平 博
山梨大学工学部	准教授	大槻 順朗
山梨大学工学部	准教授	相馬 一義
山梨大学工学部	准教授	八重樫 咲子
山梨大学生命環境学部	准教授	馬籠 純
山梨大学工学部	助教	松浦 拓哉
☆ 山梨県県土整備部治水課	課長補佐	今村 慎
山梨県県土整備部治水課	副主任	遠藤 一浩
国土交通省関東地方整備局河川計画課	建設専門官	下條 康之
国土交通省関東地方整備局河川計画課	係長	大牟 信裕
国土交通省関東地方整備局河川計画課	技官	朝田 梨加
国土交通省関東地方整備局甲府河川国道事務所流域治水課	課長	瀬尾 敬介
国土交通省関東地方整備局甲府河川国道事務所流域治水課	係長	山田 真衣
国土交通省関東地方整備局甲府河川国道事務所流域治水課	専門調査官	前田 桂子
国土交通省関東地方整備局甲府河川国道事務所流域治水課	技官	河内 辰樹
甲府市まちづくり部道路河川課	課長	齊藤 芳彦
甲府市まちづくり部道路河川課	係長	石川 漢

参考資料

「第29回 水シンポジウム2025 in やまなし」
実行委員会 活動報告

年月	会議名		主な議題	備考
	実行委員会	事務局		
令和6年度				
4月			土木学会より協力依頼(一山製粉)	
5月			土木学会より協力依頼(一岡東地方整備局平倉河川国道事務所)	
～6月			実行委員会メンバーの選出(内閣) 土木学会、国交省(地整・各事務所)、平倉市等	
9月12日		準備会	-実行委員会の規約、構成員の確認 -開催日程、会場の検討 -必要経費、予算の確認 -水シンポジウムの構成検討	
10月16日	①		-実行委員会の設立 -開催日程、会場の決定	第1回実行委員会
10月31日、1日			第28回水シンポジウム2024inなごの開催	
11月			河川財団 助成金申請	水工学委員会
12月18日	①		-水シンポジウムの構成案、メインテーマ案、予算(案)の検討 -講演等の企画提案 -運営支援業務委託発注方法の検討	第1回事務局会議
1月～			講演者への事前訪問	
1月27日	②		-水シンポジウムの構成案、メインテーマ案、予算(案)の検討 -講演等の企画提案 -運営支援業務委託発注方法の検討	第2回事務局会議
3月7日	②		-水シンポジウムの構成案、メインテーマ案の審議 -予算案の審議 -講演等の企画提案の審議 -運営支援業務委託発注方法の審議	第2回実行委員会
3月下旬			防災研究協会 助成金申請(開催の6ヶ月前まで)	水工学委員会
令和7年度				
4月21日	③		-講演等の企画検討 -現地見学会の企画検討 -広報計画及び会場レイアウトの検討	第3回事務局会議
4月20日			運営支援業務委託契約	
5月20日	④		-講演等の企画検討 -現地見学会の企画検討 -広報計画及び会場レイアウトの検討 -ホームページの開設検討	第4回事務局会議
6月10日	③		※開催内容の最終決定 -講演・除菌提供の内容 -現地見学会の内容 -広報計画及び会場レイアウト	第3回実行委員会
7月17日			広報開始(ホームページの公開、参加者募集開始)	
9月29日(月)	⑤		シンポジウム当日の準備・運営等	第5回事務局会議
10月29日(水)酒田 10月24日(金)IAM			会場準備及び各種リハーサル	
10月24日(金) PM			水シンポジウム(会館)	
10月25日(土)			水シンポジウム(観光見学会)	
1月16日	⑥		-予算収支の中間報告 -水シンポジウム報告書(案案)の審議	第6回事務局会議 (吉原副都) [2月4日意見集約]
2月26日			決算報告の監査	甲府河川国道事務所長 監査
3月2日	⑦		決算報告 水シンポジウム報告書の審議 シンポジウム完了(実行委員会解散)	第7回実行委員会
3月下旬			河川基金助成事業(完了)報告(報告期間:4月中)	水工学委員会

参考資料

9
10

氾濫堤資料

氾濫堤の位置と種類を示す地図。主要な堤防は赤線と黒線で示されています。左側には「百穂川（中川）堤防」、「神谷川堤防」、「六島川堤防」の3つの写真が掲載されています。

高層堤防

高層堤防は氾濫防止の目的で、その構造として土質コア（コア）と鋼筋コンクリート（RC）の複合構造を採用しています。RCの壁面は土質コアの崩壊を防ぐ役割を果たし、土質コアは氾濫時の水圧に耐える役割を担います。また、RCの壁面には防波板が設置されています。

高層堤防としての氾濫防止の役割

大井川治水「治水防衛隊」の活動

大井川治水「治水防衛隊」の活動の様子。隊員は赤い制服を着用し、氾濫防止の活動を行っています。

香川川 - 御勢長川の河道変遷および氾濫堤防から主要堤防遷移位置図 (1/60,000) 河川庁大井川治水防衛隊文化財課 編纂

11
12

樹形堤防資料

樹形堤防と徳島堰、将棋頭

樹形堤防とは

樹形堤防は、河川の氾濫防止を目的として、堤防の形状を樹形に設計したものである。従来の直線堤防と異なり、樹形堤防は、河川の氾濫防止だけでなく、河川の生態系を保護する役割も果たしている。樹形堤防は、河川の氾濫防止だけでなく、河川の生態系を保護する役割も果たしている。

徳島堰と将棋頭

徳島堰は、河川の氾濫防止を目的として、堰の形状を将棋頭に設計したものである。従来の直線堰と異なり、将棋頭堰は、河川の氾濫防止だけでなく、河川の生態系を保護する役割も果たしている。

将棋頭堰の構造と機能。堰の形状は将棋頭の形に似ており、河川の氾濫防止だけでなく、河川の生態系を保護する役割も果たしている。

参考資料



25 明治40年水害

山梨県では、明治前期から水害が繰り返し発生するようになりました。**明治40年(1907年)の大水害**は、8月22日から27日までの5日間大雨が降り続き、総降水量は平年で315.4mm、大月で728mm、山中湖で643mm、南都で469.3mm、奥沢で326mm、西山で32.2mm、聖崎で404mmまでに達しました。

この大雨により、重川や日川、御千流川、金川、菅子川の上流域では崩壊が多発し、家屋の全半壊や農地の孤立、耕地の流出や被災、交通の寸断など甲府盆地東部の甲府地方中心に多大な被害を出しました。

明治40年(1907年)の大水害では、甲府盆地のほぼ全域が氾濫と化し、堆積した土砂で苗吹川の流路が大きく変化しました。更に、明治44年(1911年)にも大洪水が繰り返され、明治45年にわたって苗吹川、重川、日川の合流点が決壊し、再び河川の流路が変わりました。

死者：255人／流出家屋：12000戸／畑作や流出した名産や田地：400ヘクタール／山崩れ：3353箇所／道の決壊・橋脚倒壊約：140キロメートル／道路の流出や崩壊、破損距離約：900キロメートル／倒壊した家屋：300箇所

26




明治40年水害による苗吹川の決壊






明治40年水害による
陥没状況(上)および土砂・氾濫状況(下)

明治40年水害による浸水状況 右利町東部浸水状況(上) 右利町東部甲府地方中心に多大な被害を出しました(下)

参考資料

27
28

日川水制

日川水制は北部橋から野呂橋までの二・六キロメートルにおよぶ両岸に、明治十四年から大正四年にかけて直轄工事として建設された総数七十八基の水防構築物で、山梨県最大の土木遺産である。

水制は流路を固定し、浸透を促進する構築物であり、先端が流路に直角に突き出しているのが特徴である。日川水制の水制体はコンクリート打ち込みであり見かけ上大部分は地下にある。このように大規模な水制群が一連の河川に設けられていることは、全国的にも極めて特異である。

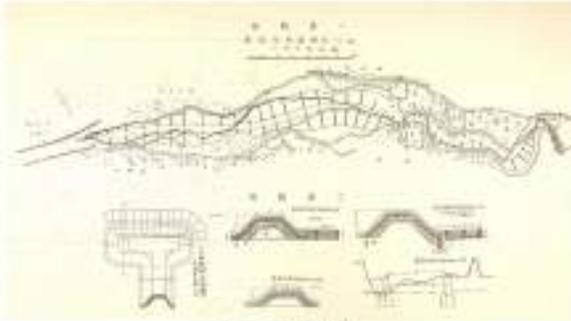
日川流域は、御坂山麓の扇状地のため、洪水のたびに幹線の流出・堆積が繰り返され、耕地確保が困難であった。明治十年の大洪水の後、防犯工事が進められたが、依然として被害は多く、明治十四年に日川水制の建設が計画された。

工事は明治十四年に完了したが、その後も両岸一帯は砂質化しており、大規模な洪水は起きていない。近年の日川暴洪は、縦溝に雨水の浸透を促すように建設されたものである。




ぶどう畑の中にある現在の日川水制

水制群遺景（中央に控橋）



日川水制群の設計図



明治40年大洪水後の日川の様子



昭和6年 第3代控橋開通式

31
32

砂防とワイン | シェラー・メルシャン 醸造ワイナリー

シェラー・メルシャン醸造ワイナリー内の「ワイン資料館」は、1904年（明治37年）最初の木造醸造場を流用した歴史的建造物で、現存する日本最大の木造ワイン醸造場の一つです。もともとは雲州園（みやこやえん）の第二醸造場であったこの建物は、山梨県新井町文化財活用プロジェクト推進委員の近代化産業遺産にも認定されています。

明治時代になって、山梨県ではワイン（当時は「葡萄酒」といわれていた）作りが進められました。明治10（1877）年、牧村（現在の山梨県早川町牧田町）に、日本初の民間ワイン醸造会社「大日本山梨葡萄酒会社」ができました。

高野正徳と土屋次郎（のちの醸造）は、本場フランスへワイン作りやぶどうの栽培技術を持ちに行き、日本に本場ワインの醸造方法を伝えました。大日本山梨葡萄酒会社は明治19年に解散することになりましたが、その醸造用具を継ぎ足し、土屋次郎と高野正徳は明治22（1889）年の「甲斐屋葡萄酒醸造場」を開きました。さらに明治25（1892）年、雲州の酒に醸造場をつくりました。

これが現在の雲州園です。ハチミツや薬方薬を混ぜた、当時の日本人好みの「甲斐屋どぶ葡萄酒」を販売し、明治36（1903）年の中央線（新橋～早川間）の開通の波に乗り、醸造場を売やし雲州などに大発展しました。



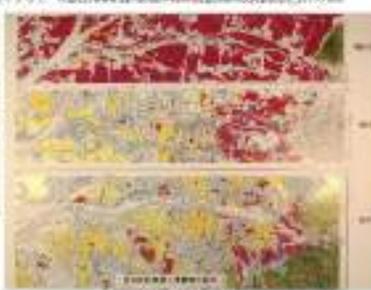

資料館外観（左）と内観（右）

出典（1999年）、「まじのむらさき」 <http://www.winemaster-hakuba-shimizu.com/2003/>




高野正徳と土屋次郎、のちの醸造

当時の葡萄酒づくりの様子



醸造事業と集約地の拡大



中央線の街道（現在の静岡ぶどう園駅）

出典：WVWVW
http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/kyou/kyou/02/004/48021196_0000000001_0000000001.pdf

参考資料

33

万力林資料

山梨大学・大淵地質学研究所

34

岩水治水地形分類図

国土地理院 地理院地図 治水地形分類図を加工して作成

万力林の概要（山梨県・山梨市）

① 万力林の概要
 万力林は、山梨県山梨市にある、約1,000haの広大な森林であり、その中心には、約100haの原生林が残っています。この森林は、かつての山梨県の自然環境を代表するものであり、その保全と活用が、地域の持続可能な発展に大きく貢献しています。

35

万力林資料

野史的治水施設 - 万力林

万力林公園

① 公園は、治水施設を中心として整備され、自然・レクリエーション・学びの場として、観光、文化に活用されています。

36

苗根川を治めるための工夫

- ① 大きくカーブした部分に流れてくる暴風雨の影響（暴風雨）によって、河川を堰き止まり、水がたまり、洪水の原因となることがあります。その対策として、
- ② 治水施設を整備し、洪水の原因を解消し、安全な環境を確保します。
- ③ 治水施設を整備し、洪水の原因を解消し、安全な環境を確保します。

令和34年洪水による被災

① 令和34年の洪水により、苗根川沿いの治水施設が被災し、河川の水位が上昇し、洪水が発生しました。その結果、苗根川沿いの住民や農家の被害が拡大しました。